

【付録】

- ①平成 29 年度 全学入学前教育プログラム実施報告
- ②平成 30 年度「自立と体験 1」実施報告
- ③平成 30 年度「自立と体験 3」実施報告
- ④平成 30 年度「自立と体験 4」実施報告
- ⑤平成 30 年度「キャリアデザイン 1」報告書
- ⑥平成 30 年度「キャリアデザイン 2」報告書
- ⑦平成 30 年度自校史教育事業報告

平成30年7月12日 学部長会提出

1 はじめに

平成29年(2017)年度の入学前教育プログラムは、(1)大学生活への夢や期待を高める、(2)学ぶ意欲を引き出す、(3)基礎学力を向上させる、(4)学び続けることの重要性を認識させる、を目的として実施した。

(1) 大学生活への夢や期待を高める

AO入試(AO9月、10月、11月)合格者、推薦入試(指定校、公募制、スポーツ文化、明星高校特別、卒業生子女)合格者を対象として実施したスタートアップ講習(平成29年11月19日(日)、平成29年12月23日(土))、一般入試(前期)合格者および一般入試(中期)合格者を対象として実施した特別講座(平成30年3月22日(木))などを通じて、平成30年4月以降の大学生活をイメージさせることができた。

(2) 学ぶ意欲を引き出す

AO入試、推薦入試合格者を対象にして行ったスタートアップ講習で実施したプレースメントテスト(以下、プレテスト)の成績によって、難易度の異なる内容からなる通信教育を継続して学習してもらった。通信教育の英語、国語、数学(数的処理、理系数学)のうち一科目でも進捗率が10パーセントに満たない入学予定者については、3月22日(木)にフォローアップ講習を実施した。通信教育では、入学までの間の時期を漫然と過ごすことなく、継続して学習してもらうことを主な目的として、前年度同様(eラーニングを主とした教材で実施し、eラーニングでは、学習が滞ったときに速やかに学習支援(電話やメール等で学習を促す)を行い、今年度は前年度以上に受講生の学習状況の把握に努め、学ぶ意欲の低下に起因する受講生の脱落防止に重点を置いて実施し、相対的には学ぶ意欲を引き出すことができた。

明星大学の歴史、現状、教育理念、教育方針および入学前教育プログラムについての理解を促すことを目的として実施した保護者ガイダンスは、90パーセント以上の参加者から高い評価を得ることができた。

(3) 基礎学力を向上させる

スタートアップ講習後から2月末日までの間、eラーニングによって学習してもらった。その結果、科目によってばらつきはあるものの、総じて学力を向上させることができた。

(4) 学び続けることの重要性を認識させる

AO入試、推薦入試合格者について、スタートアップ講習直後から2月未まで通信教育による学習を継続して行わせる等、一般入試(前期・中期)合格者については、平成30年3月22日(木)に実施した特別講座(テーマ「大学での学びを体験する」)等の機会において、学び続けることの重要性を認識させることができた。

入学前教育に関する詳細は、委託業者(株式会社ワオ・コーポレーション)による「2018年度入学対象 明星大学 入学前教育 結果報告書」を参照されたい(学部支援室に配置)。

平成30年7月12日 学部長会提出

2018年7月5日

学長 大橋 有弘 殿

明星教育センター担当副学長
明星教育センター長 菊地滋夫

平成29(2017)年度実施 全学入学前教育プログラム実施報告書

Summary (概要)

- ・今年度の全学入学前教育プログラムは、(1)スタートアップ講習、(2)通信教育、(3)フォローアップ講習、(4)スクーリング、(5)特別講座を実施した。
- ・スタートアップ講習での授業体験や在学生との関わりは、入学後の大学生活をイメージする良い機会になったのではないかとと思われる。また、同日に実施した保護者ガイダンスでは、活発な質疑応答がなされ、本学の教育に対する関心の高さがみてとれる内容となった。
- ・通信教育では、前年度よりも高い修了率となり、真面目に学習に取り組む姿勢がみられる。
- ・フォローアップ講習は、参加者は46名(前年度は6名)であった。実施時期を前年度よりも一ヶ月後ろ倒しにし、対象者を「英語・数学・国語」のうちいずれかの科目の進捗率が10パーセントに満たない「生徒」とした。また、特別講座へも参加させることにした結果、「きっかけがあれば、やる気が出る生徒」が参加することとなり、明るい雰囲気の中で活発な交流がなされる講習となった。
- ・スクーリングは、22名(前年度は62名)の参加があった。今年度は、入学前教育ガイドブック、通信教育のお知らせ掲載板などに加え、明星 LMS を使って利用を周知したが、利用者の増加には至っていない。
- ・特別講座は256名の参加があった。模擬授業後に、参加者による10分間のペアワークにより「受講した授業の感想」などを共有してもらった。模擬授業後に、参加者による10分間のペアワークにより「受講した授業の感想」などを共有してもらった。模擬授業後に、参加者による10分間のペアワークにより「受講した授業の感想」などを共有してもらった。模擬授業後に、参加者による10分間のペアワークにより「受講した授業の感想」などを共有してもらった。
- ・次年度への課題として、①通信教育(英語Sコース)受講者の客観的な能力の把握、②学習ステーションとの円滑な接続、③リメディアル教育との円滑な接続(「学習ステーション」の積極的な活用)、④明星 LMS および eポートフォリオ活用の拡充が挙げられる。

2 全学入学前教育プログラム実施概要

2-1 プログラムの構成

入学予定者に対して(1)スタートアップ講習、(2)通信教育(紙媒体による添削指導およびeラーニング)、(3)フォローアップ講習、(4)スクーリング、(5)特別講座とし、保護者に対しては保護者ガイダンスを実施した。

2-2 実施日程(表1)

	8月	9・10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
対象者			AO9月 AO10月	AO11月、指定校、公募制、スポーツ・文化活動特別、卒業生子女特別				
大学全体のプログラム	学科主任説明会(8月上旬)	①~④						
① スタートアップ講習(0)	プレテスト問題検討		19日(日)	23日(土)				4月5日及び6日 学力状態調査
② 通信教育(0)	eラーニングコンテンツ検討							
③ フォローアップ講習(0)								22日(木)
④ スクーリング(0)								
⑤ 特別講座(0)								22日(木)

(1) AO・推薦：AO9月、AO10月、AO11月入試合格者、推薦入試合格者(指定校、公募制、スポーツ・文化活動特別、卒業生子女特別など)
 (2) 一般：一般入試(前期、中期)、大学入試センター試験利用など

2-3 各プログラムの概要(表2)

スタートアップ講習	目的	対象	実施日	主な実施内容
① プレテスト	・年内合格者が入学までの期間を有効に使うための動機付けを行う ・通信教育のレベル分けを行う	AO・推薦入試合格者	平成29年11月19日(日) 12月23日(土)	・①~④のプログラムを実施 ・英語、国語(学内受験) ・数的処理・理系数学は自宅受験 ・自己紹介、大学生活準備度チェックなどのグループワーク(学科ごとの4人グループ) ・通信教育ガイダンス ・校歌の紹介 ・学科ごとに各教室に分かれて実施 ・内容は学科の判断による
② 大学生活スタート講座	・入学前の準備を確認する ・通信教育実施への動機付けを行う	上記の保護者		・大学の歴史、現状、教育理念 ・教育方針、入学前プログラムに関する説明およびDVD上映 ・在学生スピーチ
③ 学科交流会	・入学する学科の上級生や教員と接し大学生活のイメージをつくる			※論作文を除いてeラーニングで実施
④ 保護者ガイダンス	・入学予定者の保護者に明星大学を理解し、入学までの準備への協力を求める	AO・推薦入試合格者	平成29年12月~平成30年2月	【必修科目】 国語、英語、数学(数的処理)、理系数学、論作文(紙媒体) 【選択科目】 物理、化学、力学(学科によって異なる)
フォロアップ講習	・入学後の学習に支障を来さないようにフォローアップする ・学習ステーションを知る	平成30年1月31日時点において通信教育の進捗率が10パーセントに満たない科目以上ある入学予定者	平成30年3月22日(木)	・大学生活でセルフマネジメントすることの意味を考えさせ、大学生活についてのイメージを広げるためのグループワーク(6人程度)
スクーリング	・通信教育をサポートする	スタートアップ講習参加者	平成30年2月~3月	・通信教育の課題に関する質問やさらに勉強したい場合に活用するよう周知
特別講座	・一般入試合格者に対して入学前教育の機会を提供する ・大学での学びの奥深さを体験し、発想を広げる	一般合格者(前期・中期)年内入試合格者	平成30年3月22日(木)	・大学の授業体験(全学共通教育の教員) ・4人グループでのワークショップ。自己紹介・自分が受けた授業を他のメンバーに報告し、それを題材として大学での学びについてグループで考える

平成30年7月12日 学部長会提出

3. 実施結果

3-1. スタートアップ講習

11月19日(日)、12月23日(土)に実施(表3)。
 参加者は928名(対象者1064名、参加率87.2%)
 <参考>平成27(2015)年度:対象者1013人、参加者916名、参加率90.4%
 平成28(2016)年度:対象者985人、参加者874名、参加率88.7%

表3 スタートアップ講習の対象者・出席者

実施日	対象	対象者(a)	参加者(b)	参加率 (b/a)	保護者出席状況 (上段:理、下段:人)
平成29年 11月19日 (日)	AO9月、AO10月	439 (A)	387 (A)	88.2%	346 (理) 415 (人)
平成29年 12月23日 (土)	AO11月、指定校、 公勤制、スポーツ・ 文化活動特別、卒 業生子女特別	625	541	86.6	461 530
合計		1064	928	87.2	807 945

(1) プレテスト

① 英語、国語、数学(数的処理・理系数学)(スタートアップ講習時に大学内で受験)
 受験者アンケートの集計(参加者928名)によると、英語では50.2%(2016年
 度は57.8%)が「とてもむずかしかった」「むずかしかった」と回答し、49.7%(2016年度は42.3%)
 が「とてもやさしかった」「やさしかった」と回答している。
 国語では31.9%(2016年度は26.8%)が「とてもむずかしかった」「むずかしかった」と回答し、
 68.2%(2016年度は73.2%)が「とてもやさしかった」「やさしかった」と回答している。
 数学(数的処理・理系数学)では32.4%(2016年度は40.9%)が「とてもむずかしかった」「む
 ずかしかった」と回答し、67.6%(2016年度は59.1%)が「とてもやさしかった」「やさしかった」
 と回答している(受験者の多い科目を抜粋)。

表4 プレテストの難易度

	英語		国語		数学	
	2017(年度)	2016(年度)	2017(年度)	2016(年度)	2017(年度)	2016(年度)
とてもむずかしかった	3.1(%)	3.8(%)	2.4(%)	1.5(%)	5.0(%)	3.9(%)
むずかしかった	47.2	54.0	29.5	25.3	27.4	37.0
<小計>	50.2	57.8	31.9	26.8	32.4	40.9
やさしかった	45.3	38.6	56.0	60.9	47.2	43.8
とてもやさしかった	4.4	3.7	12.2	12.3	20.4	15.3
<小計>	49.8	42.3	68.1	73.2	67.6	59.1
<合計>	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

平成30年7月12日 学部長会提出

(2) 大学生生活スタート講座

- ① 導入
- ② 自己紹介
- ③ 「大学生生活準備度」チェック
- ④ 通信教育ガイダンス
 ※eラーニング委託業者が担当
- ⑤ 校歌紹介
- ⑥ 振り返り

(3) 学科交流会
 各学科の教員および在校生に協力してもらい実施した(参加教員は延べ17名、在校生は延べ96名)。

アンケート集計によると、「よかった」「まあまあよかった」という評価が97.1%であった。
 アンケートの自由記述の回答をみると、「先輩と楽しく話せた」、「学科の雰囲気を感じとれて良かった」、「学生生活をイメージできた」等の肯定的な意見が多かった。
 授業体験や在学生との関わりは、入学予定者にとって入学後の大学生生活をイメージする良い機会になったのではないかと思われる。

(4) 保護者ガイダンス

明星大学の歴史・現状・教育理念・教育方針および入学前教育プログラムについての理解を促し、
 入学までの保護者への協力を求める内容で実施した(①~④)。
 ① DVD上映/教育理念・方針の説明
 ② 入学前教育プログラムの概要説明
 ③ 大学事務局からの説明(入学後の学生生活を円滑にスタートさせるための保護者へのお願い)
 ④ 在学生からスピーチ
 ※アンケート集計(出席者807組)によると、97.4%が「とても参考になった」「やや参考になった」と回答し、高い評価を得ることができた。

3-2 通信教育

eラーニング(小論文を除く)により実施
 (1) 実施科目(表5)
 必修科目:英語、国語、小論文、数的処理・理系数学
 選択科目:物理、化学、力学(学科により異なる)
 (2) 平成29年度からの変更点(表6)
 英語の成績上位者(Sレベル:ブレラスト72点以上)に対して実施したeラーニングのTOEIC講座受講者について、英語能力を把握することを目的としてCASEC(株式会社教育測定研究所)を受験させた。
 ※CASECは、受験者の英語能力をTOEIC、TOEFL、英検の推定得点に換算して示すことができ、それによって、入学前教育段階において成績優秀者をいち早くピックアップし、入学後の英語学習および学習支援に繋げていくことができる。

表 5 学部・学科別実施科目

学部・学科	英語	国語	小論文	数学	物理	力学	化学
全体	○	○	○	※1	※2		
教育	○	○	○	※1	※2		※2
理工	○	○	○	理系数学	※2	※2	※2
	○	○	○	数学的処理			
人文	○	○	○	数学的処理			
	○	○	○	数学的処理			
	○	○	○	数学的処理			
経済	○	○	○	数学的処理			
経営	○	○	○	数学的処理			
情報	○	○	○	理系数学			
デザイン	○	○	○	数学的処理			

1) 国際コミュニケーション学科

※1 理系コース：理系数学、理系コース以外：数学的処理

※2 学系・コースにより実施

(3) 課題達成率および実施結果 (表 7)

今年度の科目別の課題達成率をみると、英語 89.6%(前年度比プラス 2.2 ポイント)、国語 91.7%(同プラス 5.5 ポイント)、数学的処理 90.2%(同プラス 0.5 ポイント) などとなっている (表 6)。入学予定者それぞれの e ラーニングによる学習状況をモニターし、学習が滞り気味の者については、電話、メール、郵便などによる励ましによる脱落防止対策を丁寧に実施したことが大きく寄与していると考えられる (物理の大幅なプラス、力学の大幅なマイナスについては受講者が少ないことによる誤差の範囲であると考えられる)。

また、スタートアップ講習で実施したプレテストの得点と、通信教育終了後に実施した修了テストの得点を比較すると、全 7 科目 (英語、国語、数学的処理、理系数学、物理、力学、化学) で点数が上昇した。e ラーニングの導入は、プレテストと修了テストの得点を比較することにより、学習成果を短時間で把握できる点、学習の進捗状況を即時に把握し学習支援を行うことができるといった利点が認められる。

表 7 科目別課題達成率

科目	平成 28 年度		平成 29 年度		(参考) 平成 27 年度 対象者 1,004 名
	対象者 968 名 (b)	(a) - (b)	対象者 1064 名 (a)	(a) - (b)	
英語	87.4(%)	2.2	89.6(%)	2.2	84.8(%)
国語	86.2	5.5	91.7	5.5	86.3
数学的処理	88.0	0.5	90.2	0.5	88.0
理系数学	78.3	-4.4	77.3	-4.4	78.3
物理	95.9	26.7	100.0	26.7	95.9
力学	73.5	-8.4	73.3	-8.4	73.5
化学	91.2	-0.1	73.8	-0.1	91.2

3-3 フォローアップ講習

通信教育科目 (英語、数学的処理・理系数学、国語・論文) において、平成 30 年 2 月 28 日時点で 1 科目でも進捗率が 10 パーセントに満たない入学予定者 (98 名) を対象に、3 月 22 日 (木) に実施した。参加者数は 46 名 (2016 年度は、対象者 81 名中参加者 6 名。ただし、1 月 31 日時点で 1 科目でも進捗率が 0 パーセントの入学予定者に対して 2 月 15・16 日に実施) となった。

(1) 目的

- ① 大学の授業に必要な基礎学力をつけることの重要性を認識させる
- ② 学習をサポートする学習ステーションについて知る

(2) 内容

- ① 大学生生活を充実させるためのきっかけとなるワーク (特別講座で実施)
- ② 「なぜ通信教育にしっかりと取り組めなかったのか」などを考えさせるグループワーク

表 6 通信教育の変更点

	平成 29 年度	平成 28 年度
実施科目	・変更なし	【必修】英語、国語、論文、数学的処理・理系数学 ※プレテストの国語 (20%程度)、英語 (10%程度) で問題量を増やして実施 【選択】物理、化学、力学 ※紙媒体のテキストは、国語を除いて配布中止
提出方法	・ポータルサイトとして明星 LMS を活用	・e ラーニングで実施 ・国語・論文は紙媒体で実施 (提出は 4 回) ※論文課題を見直し
レベル分け	・英語の成績上位者 (S レベル) に対して CASEC の受験 (任意) 機会を提供	・英語を習熟度別に 4 レベル (S レベル、H レベル、M レベル、B レベル) ※S レベルは TOEIC 対策講座を受講した
費用負担	・変更なし	・変更なし

平成30年7月12日 学部長会提出

(3) 結果

参加者は、積極的に、また楽しく演習に取り組んでいたようである。対象者を、通信教育にまったく手を付けていない者から、「英語・数学・国語」のうちいずれかの科目の進捗率が10パーセントに満たない生徒を対象としたところ、参加者が大幅に増え、また「やる気のある生徒」が参加してくれたようで、明るい雰囲気の中で活発な交流がなされる講習となった。

3-4 スクーリング

大学生活スタート講座において、入学前から学習ステーションを活用できることを伝え、通信教育の課題に質問のある者や、さらに学習したい者は、積極的に活用するように指導した。なお、スクーリングの参加者数は、22名(延べ45名)であった(前年度は62名、延べ97名)。

3-5 特別講座(テーマ:「大学での学びを体験する」)

年内入試合格者、一般入試(前期・中期)合格者を対象者とする特別講座を3月22日(木)に実施した。

(1) 目的

一般入試の合格者に対して入学前教育を受講する機会をつくり、大学での学びの奥深さを体験し、発想を広げる。

(2) 参加者 256名(表8)。

(3) 内容

- ① 全学共通教育による模擬授業
 - ・4クラスに分け、下記の教員、講座名で模擬授業を行った。
 - 吉川栄一先生(全学共通教育)、「中国最初の教師—孔子という人」
 - 丸山正義先生(全学共通教育)、「絵画を讀む—若きモネを支えた女性」
 - 金藤芬先生(全学共通教育)、「韓国語に触れてみよう—大学で外国語を学ぶ意味—」
 - 河内山晶子先生(全学共通教育)、「全身で表現して身につける英語」
 - ・模擬授業を50分間(前年度は40分間)実施し、その後参加者による10分間のペアワーク(前年度は未実施)により「受講した授業の感想」などを共有してもらった。
- ② 明星教育センター教員(榎本達彦先生、落合一泰先生、太田昌宏先生、菅原良先生)によるワークショップ
 - ・全学共通教育の教員による授業を受講し(①参照)、それぞれの授業の受講生が1名ずつとなる4名から構成されるグループを作る
 - ・自己紹介/屋敷(グループごと)
 - ・自分が受講した授業についてワークシートを使ってまとめる
 - ・完成したワークシートを使って、それぞれの受講生が受講した授業をグループのメンバーに報告する
 - ・大学での学びについてグループで考える

平成30年7月12日 学部長会提出

表8 特別講座の入試区分別参加者

入試区分	人数	割合
年内入試(AO入試・指定校推薦入試等)	162人	36.7%
一般入試・センター試験利用入試	94	63.3
合計	256	100.0

(4) アンケート集計(参加者256名、回収率96.8%)

得られた回答の99.9%が、「よかった」「やよかった」と評価している。自由記述の内容をみると、「面白い模擬授業を受けたことができた」、「高校とは学ぶスタイルが大きく変わるのだから」とを体験できた」といった、肯定的な意見が多くみられた。

4. 課題

入学前教育プログラムの目的のうち、「大学生活への夢や期待を高める」および「学ぶ意欲を引き出す」ことについては、従来のプログラムにより目的が達成されたと思われる。一方、「学び続けることの重要性を認識させる」ことは、主に通信教育(eラーニング)で実施しているものであり、学ぶ意欲が引き出されているか、基礎学力が向上しているかについては、(1)プレテストと修了テストのスコアの比較から、基礎学力は概ね向上していることがわかる。(2)しかし、大学での学びに求められる確かな基礎学力として定着したのか、短期的(一時的)な向上に過ぎないのかは、未確認であるため、今後は上記(2)について把握する必要がある。また近時の大きな課題である円滑な高大接続がなされているかなどを目的として、これまでの成果を検証し、より高次の段階を目指して継続的に検討を行っていくことが肝要である。

また、通信教育において、eラーニング課題の難易度と分量、学習期間等についての検討、フォローアップ講習の時期や方法、周知方法などの検討、スクーリングにおける学習ステーションの利用率を上げる工夫等の検討などを行う必要がある。

18歳人口が大幅に減少し始める「2018年問題」を踏まえ、入学予定者にとつてより魅力の大きい大学を創造していくための入学前教育プログラムの開発が喫緊の課題である。

(1) 通信教育(英語Sコース)受講者の客観的な能力の把握

TOEICに対応した英語(Sコース)の受講者について、通信教育の内容に即した試験(今年度はCASEC)を受験(任意)する機会を提供した。その効果を検討する。

(2) 小論文課題の採点基準の見直しとICTシステムの活用

現在の小論文課題について、「採点が甘いのではないか」「採点基準を見直す必要がある」という意見があることから、採点基準の見直し(ルーブリックの作成を含む)を検討する(2017年度に引き続き2018年度も継続)。また、手書きしたものを郵送で提出させていた課題をeラーニングシステムから直接提出する方法に変更することを検討する。

(3) リメディアル教育との円滑な接続(「学習ステーション」の積極的な活用)

入学前教育で理解が不十分なところの学習領域を、円滑にリメディアル教育に繋げることが望ましい。入学前から入学後に至る継続した学修支援の仕組みを構築し、入学予定者の学習習慣をつけるとともに学力の伸長を図る。

平成 30 年 7 月 12 日 学部長会提出

(4) 明星 LMS および e ポートフォリオ活用の拡充

通信教育の実施にあたり、今年度は明星 LMS を活用して入学予定者に対する連絡を行う仕組みを構築した。また e ラーニングでは、明星 LMS をポータルサイトとして活用した。

また、学習成果（ブレテスト、修了テストおよび学習履歴などをまとめた資料、CASEC の受験結果）を e ポートフォリオに蓄積して提供したが、次年度は小論文課題、各講座（講習）のアンケートなどを明星 LMS で実施するなど、一層の活用拡充をはかる。

以 上

学長 大橋 有弘 殿

2018年度全学初年次教育「自立と体験1」実施報告書

自立と体験1」担当副学長 菊地 滋夫
 明星教育センター長

Summary (概要)

- ・2018年度の単位修得率は、補習を実施しなかったにもかかわらず、95.1%となり、確定版の単位修得率としては、2010年度以降最高となった。(本文P4 参照)
- ・学生アンケートを1回授業時と15回授業時と無記名で実施した。教育目標に関する設問への回答を見ると、全体としては例年と同様、多くの学生が「卒業後にしたいこと」や「学生時代にすべきこと」について授業内で授業を通して考えるきっかけを得、また、身近な「学生生活」について、より考えることができたことが分かった。(本文P6～P7 参照)
- ・学生アンケートについて、「とてもそう思う」「そう思う」の回答の割合を1回と15回で比較したところ、自己評価に関する項目「自分の意見を筋道立てて話すことができる」(42.0%→69.0%)、「自分の意見を文章でわかりやすく表現できる」(37.0%→60.0%)となり、コミュニケーション能力が向上した事を評価する学生が多いことが分かる。また、授業を通して、体験的に明星大学の歴史や教育理念を学んでいる事が見て取れた。(本文P8～11 参照)
- ・授業の特徴に関する質問では、「少人数クラス」は役に立ちましたか」「他学部・他学科の学生との交流」は役に立ちましたか」「グループでの学習活動」は役に立ちましたか」の3項目で、「とてもそう思う」「そう思う」の回答の比率は、継続して高い数値を示し、学生の支持を受けていることが見て取れた。(本文P11～13 参照)
- ・「ためになった」とする回答数(複数回答可)の各授業の比率を見ると、「新しい環境で他者と出会う」(第2回)が50.0%、「自分の特徴を知る」(第13回)が46.4%、「自分や相手の大切さを知る」(第10回)が44.1%で、今年度は改訂した第13回が第2位に位置しており、学生の自己理解に対する関心が高まっていることが分かる。(本文P13～15 参照)
- ・担当教員向けアンケートでは、1年生にとって「ためになった授業」として、「大学職員に取材する」(第9回)、「聴いて相手を理解する」(第4回)が1、2位に上がった。第3位は3つの回が同率でならんでおり、評価の平準化が見られる。(本文P16 参照)
- ・82名の学生がSA/TAとして授業をサポートし、9名の学生がSA コーチとしてSAをサポートした。SA/TAおよびSA コーチに対して新たな研修、資料の配布などを行い、レベルアップを図った。(本文P16 参照)
- ・次年度に向けて「自立と体験1」の授業をより良くしていくため、授業内容等の改善については今後も継続していきたい。特に次年度改善すべき点は昨年に引き続き、①5回を通して出席し続ける意識付け、②SAの役割範囲の平準化、③グループリーダー(明星教育センター教員)と担当教員との交流強化、である。(本文P17 参照)

1. 授業概要

1.1 教育目標

明星大学に学ぶ学生としての自己理解を助め、各自の理想や自己を明確にしておくこと

1.2 行動目標・到達目標

他者との関わりを通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解すること

1.3 授業内容 (2017年度からの変更点)

2018年度の授業内容は表1のように実施した。2017年度からの主な変更点は次の通りである。

(1) 授業全体の変更

- ・第13回授業名の変更
 (変更前) 仕事と自分について考える → (変更後) 自分の特徴を知る
- ・節の区切りかたの変更

2017年度は第二節に実施した「ルールとマナーを考える」を、2018年度は第一節の第6回に移動した。これは、「ルールとマナーを考える」の授業内容を入学後早めに実施し、「自立と体験1」の授業内で再見させることが望ましいである。また、この移動により第二節が全てロテーション授業となりわかりやすくなった。(表1、「第1回-第15回の授業名」参照)

(2) 授業内容に関する変更点 (3点)

- ・第6回「ルールとマナーを考える」(ポートフォリオp.43)に新しいコラム「おひいさま」を追加した。コラム「おひいさま」では、コミュニケーション手法の一つ「アサーション」について具体的な場面を設定して説明し、ルールやマナーに違反している人への対応について考えさせる内容となっている。また、アサーションは、第二節「自分や相手の大切さを知る」とも関連するため、「自分や相手の大切さを知る」のポートフォリオ、教員説明等を追加した。
- ・2018年度は入学前実施するアセスメントテストが「PROG」に変更された。そのため、第13回の授業内容を、「PROG」をベースにしたものに変更し、内容に合わせて授業名も変更した。
- ・第14回「これからの大学生活を描く」で使用するワークシート「大学生生活デザインシート」にステップ6「長い期間で考える ～ ○年後の私を描く」の項目を入れた。昨年まで実施していた「10年後の自分への手紙」に代わるものである。

(3) 補習授業について

- ・2018年度は、2017年度と同様に補習授業を実施しなかった。不合格者および補習対象者は減少しており、多くの学生が1年前期で自立と体験1を修了することが可能となっている。2016年度から続いているこの傾向に変化がない限り、今後も補習の実施は必要ないと考えられる。
- ・なお、前期授業期間内での単位修得のための、連絡先席者への電話連絡、担当教員への働きかけは、継続して実施した。

表1 第1回～第15回の授業名

回	授業名	回	授業名	回	授業名
1	オリエンテーション	7	明星大学を知る (合同授業・ローテーション授業)	12	卒業生から学ぶ
2	新しい環境で他者と出会う	8	明星大学を紹介する (ローテーション授業)	13	自分の特徴を知る
3	大学での学びを考える	9	図書館にふれる (合同授業・ローテーション授業)	14	これからの大学生生活を描く
4	聴いて相手を理解する	10	大学職員に取材する (ローテーション授業)	15	未来の自分へのメッセージ
5	話し合いを体験する	11	自分や相手の大切さを知る (ローテーション授業)		
6	ルールとマナーを考える				

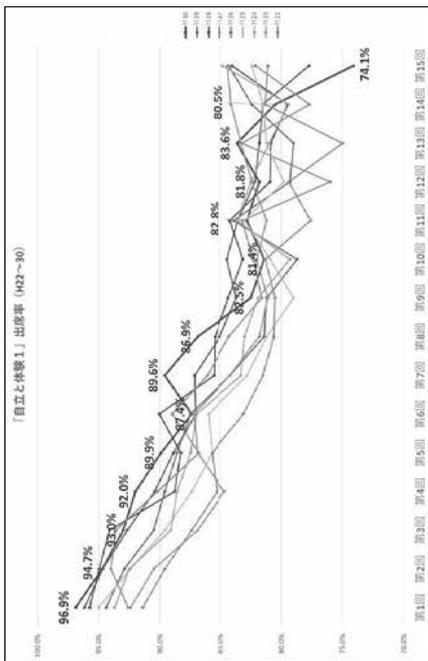


図1 「自立と体験1」出席率の推移

2. 実施結果

2.1 開講曜日・時限・設置クラス数等

1年生前期必修科目として70クラスを開講した。開講曜日・時限・設置クラス数は、金曜日1時限25クラス、金曜日2時限25クラス、土曜日1時限9クラス、土曜日2時限9クラスであった。

授業は、各学部専任教員39名、明星大学教育センター教員9名、および非常勤講師5名が担当した。

1クラスあたりの履修学生数は30-32名であった。

2.2 履修者数

履修者数は2,126名(4月1日時点)であった。

2.3 出席率

2018年度の出席率は、表2の通り86.5%で2017年度と同率となった。第15回は74.1%と大きく下がった。この傾向は昨年度と同様であった。昨年度第15回の出席率が大きく下がったことを受け、昨年同様学生向けニュースレターを発行し、新たに「自立と体験1」第三節授業のヒントを担当教員に配布したが、効果は見られなかった。

表2 「自立と体験1」各年度の出席率

年度	2018年度	2017年度	2016年度	2015年度	2014年度	2013年度	2012年度	2011年度	2010年度
出席率	86.5%	86.5%	86.7%	85.5%	85.2%	84.5%	85.1%	84.9%	82.7%

2.4 単位修得率

2010年度以降の「自立と体験1」の単位修得率は表3の通りである。2018年度の単位修得率は95.1%となった。2017年度は補習を実施しなかったため、最終的な単位修得率は低下した。今年度は昨年度同様補習を実施しなかったが、単位修得率は2010年度以降最高となった。正規授業での単位修得者が増加していることが分かる。

表3 「自立と体験1」単位修得率

年度	2018年度	2017年度	2016年度	2015年度	2014年度	2013年度	2012年度	2011年度	2010年度
単位修得率(正規授業)	95.1%	94.0%	93.9%	92.1%	91.3%	91.5%	91.0%	88.5%	89.9%
単位修得率(補習を含む)	補習実施せず	補習実施せず	95.1%	93.4%	93.6%	93.8%	94.0%	91.4%	93.0%

2.5 担当教員向け研修

担当教員向けに、以下の事前研修(表4)を実施した。

表4 事前研修(事前説明会及び授業手法説明会)の概要

日程	事前説明会	授業手法説明会
2018年9月1日/15日・3限 (同内容・どちらか1回参加)	2018年3月1日/15日4限 (同内容・どちらか1回参加)	
目的	授業のねらい・到達目標を理解する 全15回の授業内容・教養を理解する 授業運営のためのサポート体制を理解する	グループ学習について理解する 授業を担当するイメージをつかむ
内容	①本日の目的と内容 ②細講内容 ③「自立と体験1」の特徴(VR投影、授業の特徴がポイント、7年間の実践の成果(学生アンケート等)) ④「自立と体験1」の意義(大学の教育目標との関連、外部からの評価、大学4年間の学習への効果) ⑤体系的キャリア教育プログラム ⑥教員の役割・サポート体制 <昼食・教員間交流> ⑦気になる学生への対応 ⑧教養の見方・授業の概要 ⑨グループワーク(実践の授業内での工夫の検証、経験者の工夫の共有)	①趣旨説明 ②グループ学習とは ③授業手法体験 ④スキル紹介と解説 ⑤振り返りの体験とまとめ

上記の研修の対象者は、事前説明会が全担当教員、授業手法説明会は初めて担当する教員と希望者である。当該日程の研修会欠席者に対して、別に個別対応することで、参加率は100%となっている。前年度の振り返りをもとに内容を改善しながら、今年度も例年通り実施した。2018年度の担当教員アンケートでは、全回答30名中28名が内容は適当と回答した。具体的には「授業のイメージを描くことができた」、「自立と体験1の意義がわかった」「具体的な進め方が体験でき、大きな安心感を得ることができた」という意見があった。適当でないという意見は1件で、「長すぎる」というものであった。

2.6 SA/TA・SAコーチの運用に関して

(1) SA/TA

2018年度は、開講70クラスに対して、82名の学生がSA/TAとして授業のサポートを行った。SA/TAに関しては、前年までの振り返りをもとに、2018年度は大きな見直しを行った。主な変更点は、①7月中説明会の実施(例年は9月も実施)②面談等の選考の実施、③SA基本業務一覧表の作成、④事前研修会実施方法の変更、⑤明星LMSの活用である(詳細は表5参照)。新たに取り入れた方法によりSAの役割がより明確になってきており、これらは、来年度も改善しながら継続することを予定している。

また、2017年度から実施している「SA振り返り会」は、SA体験の意味づけとSAの活躍に対する慰労をねらいとして、2018年度も実施した。

(2) SAコーチ

2018年度は、9名の学生がSAコーチとしてSAのサポートを行った。
2017年度からの変更点は、①SAコーチ業務説明書の作成、②定期的なSAコーチ連絡会の実施(4月6日、4月9日、6月26日、9月21日予定)、③日報フォーマットの変更である。
4日目となりSAコーチも役割が定着しつつあるが、担当教員への周知等、来年度に向けてさらなる改善を予定している。

表5 SA/TA運用の詳細

日程	内容	詳細・2017年度からの変更点
2017年7月24日-29日	SA説明会(第14回授業でチラシ配布)	前期7月中旬に説明会実施。 参加者352名
7月24日-29日 9月11日-15日	SA申込書提出(明星LMS経由)	①SA/TAを希望した理由 ②どんなSA/TAになりたいか 申込者172名
10月10日-13日 10月16日-20日	意思確認面接	新規実施。 申込書提出者全員と個別面接。
11月27日-12月4日 2月1日-2日	コミュニケーションスキル 研修会(希望者参加)	新規実施。 ①ストロークスキル編2回(参加者数20名) ②スピーチスキル編2回(22名) ③フアンリレーションスキル編3回(30名) 研修と切り離して実施。
180年1月15日-16日	雇用手続き	雇用手続き者140名(勤労学生含む)
3月26日-30日	勤務可能日提出(雇用手続き者)	LMS経由
4月4日	SA・SAコーチ内定者発表	MEC事務室掲示 SA82名、SAコーチ9名
4月5日	担当クラス発表	新規実施。
4月5日-7日	SA業務説明会	勤務決定者を対象に実施。

3. 授業評価

授業改善を目的として、第1回授業時と第15回授業時に随修学生に対して「自立と体験1」オリジナルの学生アンケートを実施している。各設問の回答結果は、図2-図14である(集計にあたっては記述なしの無効回答を除いた)。初年度(2010年度)からの9年間の経過も交えて、教育目標の達成、学生の自己評価、学生の反応について考察する。

3.1 教育目標の達成度について

教育目標(明星大学に学ぶ学生としての自己理解を助け、各自の理想や目的を明確にして行くこと)の達成度については、2つの質問で尋ねている。

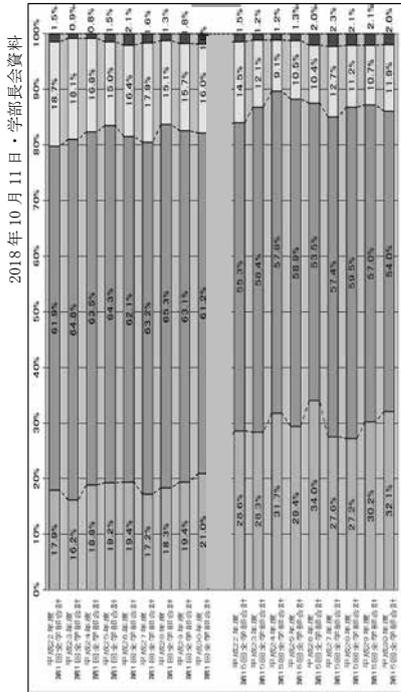


図3 学生時代にすべきことを考えていますか？

3.2 学生の自己評価について

6つの設問で学生に自己評価を尋ねている(図4図9)。第1回授業時と第15回授業時の「とてもそう思う」、「そう思う」の肯定的回答の比率は全体としてはここ数年とほぼ同様の数値を示している。「敬意・関心を持って他者の話を聞くことができますか?」については、91.8%の学生が「自立と体験1」受講前からできていると考えており、第15回授業後も91.8%と同じ数値を示している。しかし、「とてもそう思う」の数値の比較では32.1%から43.1%へと11ポイント増加している。この15回授業後に「相手への敬意、関心」を高めることができていると共に、入学する学生の質が高まっていると考えられるのではないだろうか。

一方、入学当初は半数以上の学生が自信のなかった「自分の意見を筋道立てて話すことができずか?」は26.4%ポイント増加(37.0%→63.4%)となり、授業を通してできるようになったと自己評価している。「自分の意見を筋道立てて話す」について自由意見欄には「自分の意見を筋道立てて話すことは苦手だったけれど、自立と体験1で少し克服できた」、「自分の意見を相手に伝える大切さを学ぶことができたこと。ただ伝えるだけでなく、相手にいかに分かりやすく伝えることができるのかを考え直すことができた」など授業でこの力を身につけられたという記述があった。

また「明星大学の歴史や教育の特徴を知っていますか?」(24.8%→49.8%)、「大学の図書館の利用方法を知っていますか?」(51.6%→88.9%)も理解できたと回答する学生が増加している。学長の話を開いたり、先輩の話を開いたり、実際に図書館で本を探したりするという体験を通しての学びが非常に有効であることがわかる。

2018年10月11日・学部長会資料
「卒業後にしたいこと(趣味)を考えていますか?」(図2)に「とてもそう思う」、「そう思う」と肯定的に回答した学生は、第1回が71.2%、第15回が73.6%であった。また、「とてもそう思う」の回答も第1回33.9%から、第15回37.2%へと増加している。卒業後にしたいこと(趣味)については授業開始前から考えられていた学生はさらに考える機会となり、また考えていなかった学生にも考える機会を与えたことが考えられる。

自由記述欄では、「自分の将来について細かく学ぶ・考えることがこれまでなかったが、この授業で考えることができた」、さらに卒業生のことを知れたのが良かった、「将来の計画を大まかだが考えることができた」、「自分の将来について具体的に考えることができたこと」など、4年後を考えながら大学生活を送るきっかけを得た学生がいたことが見て取れた。

次に「学生時代にすべきことを考えていますか?」(図3)への肯定的回答は第1回82.2%、第15回86.1%であり3.9%増加した。また、「とてもそう思う」の回答も第1回21.0%から、第15回32.1%へと大きく増加している。このことから「学生時代にすべきこと」では、授業を受講したことで、初回授業にまよって肯定的に回答している学生の中にも変化が見られたことが分かる。自由記述欄には「自分がこれから4年間どういふ風な学生生活を送っていくのか、目標を立てたり、考えたりできた」、「自分について考える機会はなかった」と思うので、自立と体験1で自分がやるべきこと、4年間やるべきことなどの計画を立てられてよかった、「大学4年間でやりたいことを書き出すことによつて、より明確に4年間の計画を立てることができた」などがあり、こちらもこの授業で4年間を考えるきっかけを得ていることが分かった。

学習目標全体としては、多くの学生が「卒業後にしたいこと」や「大学時代にすべきこと」について授業内で考えることができたと考えられる。この傾向は9年間継続して見られており、1年前期の初年次教育科目としての教育目標の達成は9年間継続して行えているといえる。

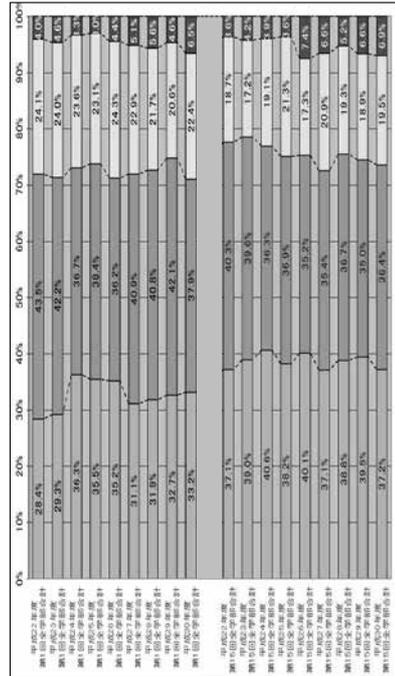


図2 卒業後にしたいこと(趣味)を考えていますか？

■ ともそう思う ■ そう思う ■ あまりそう思わない ■ 全くそう思わない

2018年10月11日・学部長会資料

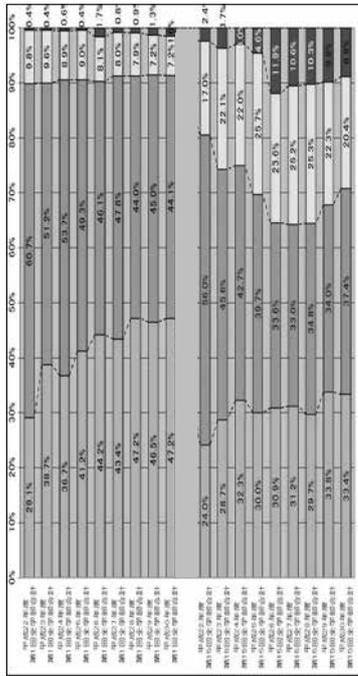


図9 規律を守って学習活動ができますか？ (無断欠席や遅刻をしない、など)

■とてもそう思う ■そう思う ■あまりそう思わない ■全くそう思わない

3.3 学生の反応

(1) 授業の特徴に関する質問

「自立と体験1」の授業の特徴については15回目の授業のみで5項目を尋ねている。『少人数クラス』は役に立ちましたか？ (91.2%) (図10)、『他学部・他学科の学生との交流』は役に立ちましたか？ (93%) (図11)、『グループでの学習活動』は役に立ちましたか？ (92.2%) (図12) の3項目全てにおいて90%を超え、学生たちの「自立と体験1」に対する支持が高いことがわかる。自由記述欄には、「少人数で話すことにより、自分の素を出すことができ、楽しく受け入れられてよかった」、「他学部の人と出会って自分とは違う考えを持っている人の話を聞いて、自分のマイナス面を変えられるよう努力しようという気持ちになれてよかったと思います」、「高校の頃は好きではなかったグループ活動が好きになりました。以前は相手の意見が自分と異なるとき、形式的にしか聞いていきましたが、この授業を通して本当に意味あるものとして相手の意見を受け入れるようになりました」などがあり、これらの「自立と体験1」の特徴を学生は好意的に捉えていることが分かる。

また『ポートフォリオ』は役に立ちましたか？ (81%) (図13)、『課題に取り組みることにより学びが深まりましたか？ (81%) (図14) の2項目も80%を超える高い数値となっている。自由記述では「自分と相手と向き合う機会が多くて、毎回ポートフォリオで振り返りをすることで授業の内容がよくわかった」、「ポートフォリオを使って自分の言葉でちゃんと意見をまとめ振り返りができるようになった」、「まとめ(課題)を書くことで文章として自分の思っていることを再確認できたこと」「自分の意見を書くスピードが上がった」などの意見があり、多くの学生はポートフォリオを記入する意味や課題の意義を理解していることが伺える。

2018年10月11日・学部長会資料

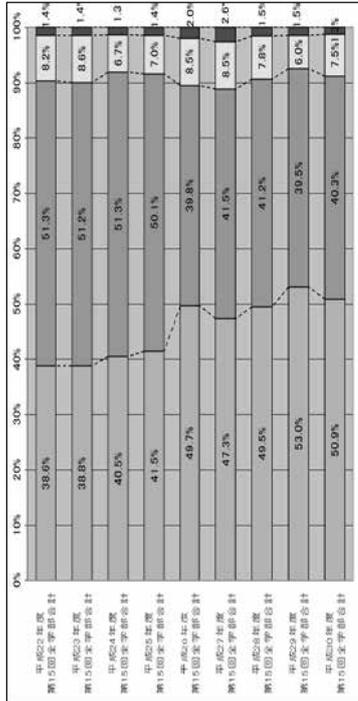


図10 「少人数クラス」は役に立ちましたか？

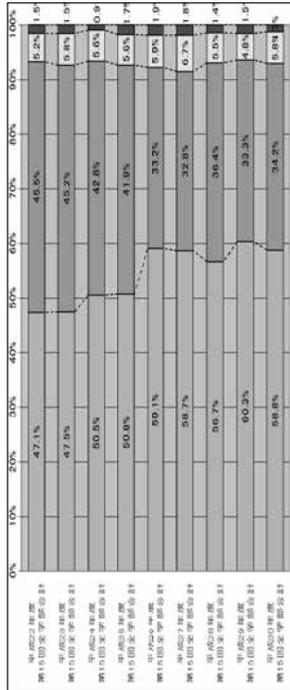


図11 「他学部・他学科の学生との交流」は役に立ちましたか？

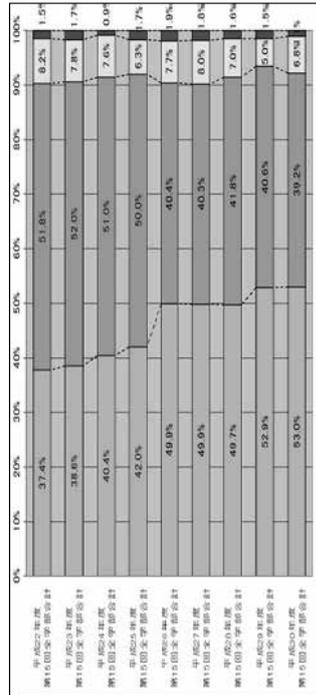


図12 「グループでの学習活動」は役に立ちましたか？

■とてもそう思う ■そう思う ■あまりそう思わない ■全くそう思わない

2018年10月11日・学部長会資料

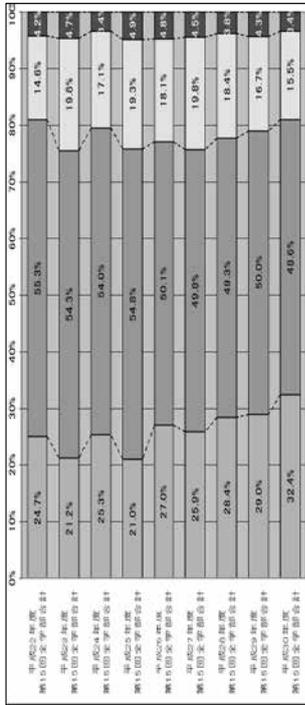


図13 「ボートフォリオ」は役に立ちましたか？

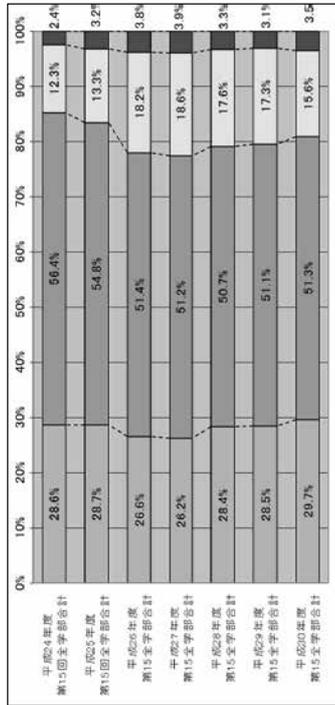


図14 提出課題に取り組みることにより学びが深まりましたか？

② 「ためになった授業」

15回の授業を通して「ためになった授業」とする回答から、学生の反応について考察する(表1および図15参照)。一番学生がためになったと回答したのは第2回「新しい環境で他者と出会う」(50.9%)で、5年連続でこの回が第1位となっている。第2位は第13回の「自分の特徴を知る」(46.4%)で、第3位はこれまで5年間2位を継いでいた第10回「自分や相手の大切さを知る」(44.1%)であった。今年度で授業内容が設定された第13回が44.1%高い評価を受けたのは、この回の授業内容が「PROG」というアセスメントを用いた「自己理解」となっており、自分を知ることへの学生の関心の高さを示しているといえる。一方で、第8回「明星大学を紹介する」のような何かを置くよりも、自分たちで何かを創り出し自ら考えるような活動の評価が低い傾向にあり、学生にこのような活動の意義をより理解させることが望まれる。

2018年10月11日・学部長会資料

自由記述欄ではそれぞれの回について「やりたいことは今のうちにやっておこうと4月に目標を立ててから、踏み出している」ので、この授業で自分の目標を明確にしたのがよかった(第2回)、PROGで自分の強み、弱みを知れてこれから役に立ちそう。弱みを変えていきたいと思った(第13回)、「相手を大切に」という授業では、自分が相手を大切にしたい経験や大切にされた経験を振り返って、普段から自分自身些細なことでも相手を大切にしていたんだなということ改めて感じました(第10回)などがあつた。学生の関心が高い回のテーマとしては、大学生活への適応、自己理解、人間関係にあることが見て取れる。

表1 第1回～第15回の授業名(再掲)

回	授業名	回	授業名	回	授業名
1	オリエンテーション	7	明星大学を知る (合同授業・ローテーション授業)	12	卒業生から学ぶ
2	新しい環境で他者と出会う	8	明星大学を紹介する (ローテーション授業)	13	自分の特徴を知る
3	大学での学びを考える	9	図書館こぶれる (合同授業・ローテーション授業)	14	これからの大学生活を描く
4	聴いて相手を理解する	10	大学職員に取材する (ローテーション授業)	15	未来の自分へのメッセージ
5	話し合いを体験する	11	自分や相手の大切さを知る (ローテーション授業)		
6	ルールとマナーを考える				

3.4 関係者による授業評価

受講している学生以外の関係者にも、授業終了時にアンケートを実施している。担当教員、SV/TA、職員インタビューに協力いただいた担当者に対するアンケート結果を抜粋し、授業評価について考察する。

(1) 担当教員

回答率56.6% (63名中30名)であった。学生の印象について「話し合いや自らの発表に刺激をもらっている学生が多かったように思う」、「授業が進むにつれて学生の授業への取り組み姿勢が前向き、積極的になりました」、「学生はグループ学習を楽しんでいるように感じた」、「大部分の学生のコミュニケーション能力が向上したように感じる」といった意見があった。

学生にとって「ためになった」授業ベスト3は、第9回「大学職員に取材する」21名、第4回「聴いて相手を理解する」19名、第5回「話し合いを体験する」、第7回「明星大学を紹介する」、第8回「図書館にふれる」が同数の17名であった。

ためになった理由としては、「大学職員へのインタビューで刺激を受けた学生が複数いた」、「職員へのインタビューは、学生が本当に生き生きしていた。もう一節すすつさせなかったし、インタビューの場所ももっと増やしてほしいと思う」、「コミュニケーションスキルの向上に役立った」、「学生同士が聞いて話し合う姿勢を身に付けるという点で連続性があり良かった」、「大学生として能動的に学ぶという姿勢について意識づけられたと思う」などの意見があった。

授業を担当したかに関する回答では、19名が「授業を担当することを楽しんだ」を喜び、13名が「授業を担当することは大変だった」を選んだ。そのうち6名が両方を選んでいる。また、16名が「グループ学習形式の授業は進めやすかった」と回答していた。

教員が選ぶ「ためになった」授業ベスト3には、第一節、第二節の授業が入っているが、第三節の授業は含まれていない。今年度は第三節の出席率向上が課題であったが、担当教員自身が第三節の授業の重要性を感じられていないという要因も検討する必要がある。

(2) SV/TA

回答数は82名中16名であった。1年生の変化については、多くの学生が「徐々に話をするようになった」、「成長した」、「変化があった」という記載をしている。「学部・学科の枠を超えて学生同士が仲良くなった」という意見もあった。1年生にとって「ためになった」と思う授業では、第14回「これからの大学生活を描く」13名、第13回「自分の特徴を知る」11名、第7回「明星大学を紹介する」が8名であった。ためになった理由として、「大学生活4年間を送るにあたって自分や大学を知り個々に目標を立ててそれに向って進むことを1年生が自ら理解できる内容」、「今の自分にあるもの、足りないものを理解してからこれからのことを考えられるから」といった意見があった。第13回については、1年生と同様にSV/TAの役割も高かった。自分自身の振り返りとしては、「授業補助を担当することとは充実した体験だった」に15名、「担当したことと自分自身の学びがあった」に13名が「はい」と回答している。ただし、回答率10%であることを考えると、「充実した学びがあった」と感じる学生

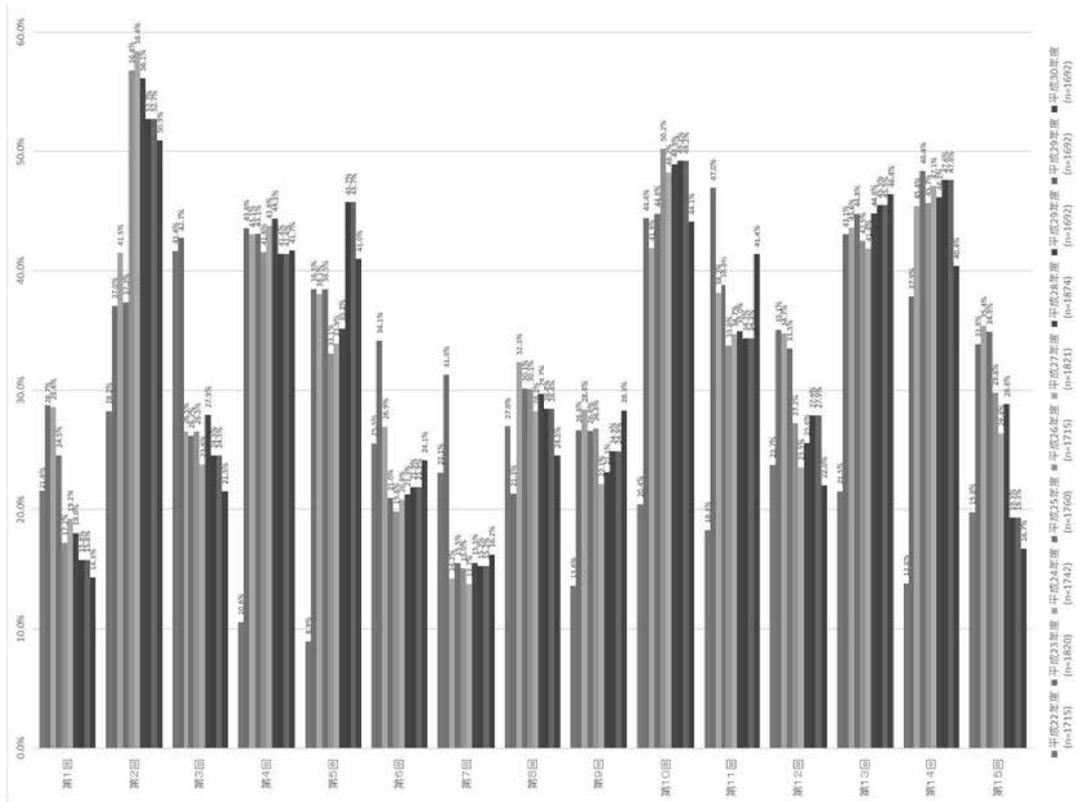


図15 「ためになった」と思う授業に関する回答の経年比較 (2010年度～2018年度)
※各年度の割合は回答者のうち「ためになった」と回答した人の比率（無効回答を除いて計算した）

2018年10月11日・学部長会資料
 本年度はこれらの方策をより一層レベルアップするとともに、SAコーチとも協力しながら、SAの質向上に努めていくこととした。

(3) 協力部署

回答数は18名であった。1年生の印象として「熱心」、「真面目」、「素直・おとなしい」、「意欲的」、「好印象」というプラスの回答をした人は14名で、「意欲的とそうでない学生が2極分化している」、「やらされ感がある」と回答した人が4名であった。また「決められた質問ばかりであった。もっと積極的になってほしい」という趣旨の回答も8件あった。

インタビューを受けて自分に関心して気づいた点等を尋ねた設問には、「日常の仕事を再考した」、「職員としての意識を再確認した」という意見が複数挙げられていて、学び合う関係が「自立と体験1」の授業の中にあることが再認識された。

4. 次年度に向けて

単位習得率は、2015年度以降、毎年最高記録を更新し、2018年度は95.1%となった。授業担当教員、各部署の職員、SA/TA、明星教育センターの教職員・助教授学生の「教職学協働」による授業内容および授業運営の改善が、単位習得率の向上に寄与していると考えよう。また、入学学生の質の変化もその理由の一つと考えられる。

授業内容および授業運営については、従来の取り組みをさらに充実させ、一層の改善につなげていきたい。2017年度の以下の3点の課題についても、引き続き改善を目指したい。

(1) 15回を通して出席し続ける意識付け

出席率の平均は高かったものの、各回の出席率を見ていくと、2017年度までの傾向同様、後半に向かって下降傾向が強い。特に、2018年度は第三節の第13回目以降、大きく下降し、最終第15回は74.1%まで下がった。

学生が第三節の授業内容に関心をもち、主体的に出席し続ける意欲を持てるように、2018年度は2つの取り組みを行った。学生向けニュースレター「第三節スタート特別号」と、担当教員向けの『自立と体験1』第三節授業のヒントである。SAからの働きかけも依頼し、授業内でスピーチ等を行ってもらったが、出席率に関しては思うような結果に繋がらなかった。

第三節に「問題提出回を設ける」等の外発的働きかけを取り入れるという方法もあるが、「自立と体験1」が学生の主体性を育む授業である限り、良い授業を作り続け、それを学生や担当教員に伝え続けることが重要であると考えられる。

次年度に向けては、第三節の授業内容のさらなる充実、学生・担当教員への働きかけの工夫を行っていききたい。

(2) SAの役割発揮の平等化

SA/TAは、履修学生にとっても、担当教員にとっても、非常に重要な役割を果たしている。一方、やや役割をはき違えたり、脱線してしまうSA/TAも一部に見受けられるという点は、2017年度の報告書で指摘したとおりである。

2018年10月11日・学部長会資料
 本年度はこれらの方策として、「SA/TA基本業務一覧」の配布等、様々な運用上の工夫を行い、一定の改善は見られた。

次年度はこれらの方策をより一層レベルアップするとともに、SAコーチとも協力しながら、SAの質向上に努めていくこととした。

(3) グループリーダーと担当教員との交流場面の強化・増加

第三節の出席率の向上も含め「自立と体験1」の授業の質向上は、授業内容の改善とともに、担当教員にかかっている部分も小さくない。グループリーダーの役割は、現場での実際的な問わりを担当教員と持つことにあると考えられる。2018年度は、事前研修の類合わせや、定期的なメール発信を通じて、グループリーダー（明星教育センター教員）と担当教員との交流を強化した。

次年度は、今年度の実施内容を継続するとともに、担当教員とより多くの交流を持つよう工夫したい。

以上

報告書作成：明星教育センター
 榎本遼彦・太田昌宏・落合一泰・菅原良・鈴木浩子・高橋海子・平塚大輔・福山佑樹・南 愛

・各年度とも5月1日現在の在籍者数で算出
2. 「自立と体験1」担当教員について

(1) 「自立と体験1」担当教員数

	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
専任	46名	46名	46名	46名	46名	46名	41名	41名(※1)	39名
明星教育センター	5名	5名	5名	5名	5名	9名	9名	8名	9名
非常勤	1名	1名	2名	2名	3名	3名	4名	4名	5名
合計	51名	52名	53名	53名	54名	58名	54名	53名	53名

※1 後期担任教員として本学へ兼任予定であったが、前期は都合により非常勤講師として担当した学部職員を1名含む

(2) 2018年度「自立と体験1」担当教員向け事前説明会参加者

	参加者	参加者	3月1日(木)	3月15日(水)	個別対応
シラス・ホートン・オリエント・朝陽理学院	44名	44名	21名	19名	4名
授業方法に即して説明会(新しくご参加頂く生、希望者対象)	20名	新規 19名 継続 1名	8名	9名	2名

(3) 「自立と体験1」代講件数

実施年度	代講件数(部→教)
2010年度	23件
2011年度	31件
2012年度	23件
2013年度	15件
2014年度	20件
2015年度	16件
2016年度	12件
2017年度	13件
2018年度	7件

(4) 「自立と体験1」ランチャミーティング参加者人数

実施年度	参加者人数(部→人数)
2016年度	184名
2017年度	139名
2018年度	154名

※2017年度の6月9日(金)は、「自立と体験1」公開講座を実施したため、ランチャミーティングを開催しなかった。

3. SA・SA コーチについて

(1) 「自立と体験1」SA人数、説明会参加者数

実施年度	SA人数	SA説明会参加人数(概算)
2010年度	40名	-
2011年度	52名	-
2012年度	51名	-
2013年度	68名	130名
2014年度	83名	140名
2015年度	92名	159名
2016年度	102名	167名
2017年度	94名	352名
2018年度	82名	286名

・2013年度より公募(説明会)開始。

2018年度「自立と体験1」データ記録

1. 「自立と体験1」受講生について

(1) 受講生人数(5月1日現在)

年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
2092名	2151名	2021名	2141名	1989名	2169名	2037名	2148名	2126名	2126名

(2) 出席率

年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
82.7%	84.9%	85.1%	84.5%	85.2%	85.5%	86.7%	86.5%	86.5%	86.5%

(3) 「自立と体験1」単位修得率

年度	単位修得率(正規授業)	単位修得率(補習を含む)
2010年度	88.9%	98.9%
2011年度	88.5%	91.4%
2012年度	91.0%	94.0%
2013年度	91.5%	98.8%
2014年度	91.3%	98.6%
2015年度	92.1%	98.4%
2016年度	93.9%	95.1%
2017年度	94.0%	-
2018年度	95.1%	-

・単位修得率(正規授業)は15回の授業科目での修得率、単位修得率(補習を含む)は、補習実施後の修得率

・単位修得率の母数は、5月1日現在の学生数で算出

・2017年度以降は、補習を実施していない

(4) 「自立と体験1」補習について

実施時期	9月～10月							2017年度以降
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	
コマ数	9コマ	9コマ	9コマ	9コマ	9コマ	9コマ	8コマ	
補習対象者	130名	126名	89名	92名	78名	66名	51名	
申込者(申込数)	85名	76名	73名	77名	62名	49名	35名	
	(59%)	(59%)	(82%)	(84%)	(79%)	(74%)	(89%)	
合格者(合格数)	83名	67名	64名	56名	44名	30名	28名	
	(96%)	(88%)	(73%)	(60%)	(71%)	(68%)	(80%)	

※1 当日、参加1名含む

※2 1名退学、1名診療科目変更のため、補習対象者から除外されたため、上記人数から除かれている。

(5) 4年在籍率(留年・編入・編出することなく4年4年生になった学生)

	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
入学生	70.2%	66.5%	66.3%	70.9%	72.6%	77.1%	80.4%	78.1%	77.7%	77.7%

・各年度とも5月1日現在の在籍者数で算出

(6) 3年在籍率(留年・編入することなく3年3年生になった学生)

	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
入学生	76.7%	74.8%	73.7%	79.5%	81.5%	85.0%	87.3%	86.5%	85.3%	86.5%

対応者数(部→人)	10名	3名	10名	10名	8名	4名	12名	155名
-----------	-----	----	-----	-----	----	----	-----	------

③2018年度「大学職員に取材する」協力部署への事前説明会参加者数

開催日時	参加者
5月16日 11:30~12:30	11名
5月18日 15:30~16:30	1名

(2) 2018年度「自立と体験」ゲストスピーカー

実施年度	人数	学部学科学生
2018年度	5名	教育学部教育学科3年3名、2年生2名

以上

(2) 「自立と体験1」SAコーチ

実施年度	SA コーチ人数 (0年生)	SA コーチ人数 (4年生)	合計
2015年度	3名	2名	5名
2016年度	3名	6名	9名
2017年度	3名	3名	6名
2018年度	2名	7名	9名

・SAコーチは2015年度より導入

4. 学内協力部署・職員・学生について

① 「大学職員に取材する」対応部署 (2010年度、2011年度は、大学の施設に委ねる)

実施年度	部署数	協力部署
2010年度	5	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター
2011年度	7	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、明星教育センター
2012年度	12	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、総務課、広報課、人財課、広報課、調査センター、通務研究センター、明星教育センター
2013年度		教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、総務課、広報課、人財課、広報課、調査センター、通務研究センター、通信教育部、明星教育センター
2014年度	13	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、調査センター、総務課、学長室広報課、人財課、通務研究センター、地域交流センター、通信教育部、明星教育センター
2015年度		教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、調査センター、総務課、学長室広報課、人財課、通務研究センター、地域交流センター、通信教育部、明星教育センター
2016年度	14	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、調査センター、総務課、学長室広報課、人財課、通務研究センター、地域交流センター、通信教育部、明星教育センター
2017年度	14	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、調査センター、総務課、学長室広報課、人財課、通務研究センター、地域交流センター、通信教育部、明星教育センター
2018年度	15	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、調査センター、総務課、学長室広報課、人財課、通務研究センター、地域交流センター、通信教育部、アドミッションセンター、明星教育センター

・上記以外に「図書館に取材する」の回で、図書館職員の方より説明会のご協力をお願いしています。

②2018年度「大学職員に取材する」各部署対応人数 (部→人数)

部署名	教務企画課	学生サポートセンター	キャリアセンター	国際教育センター	ボランティアセンター	情報科学研究センター	調査センター	アドミッションセンター
訪問予定グループ数	35	35	35	29	19	34	27	8
対応者数(部→人)	33名	14名	12名	20名	9名	12名	10名	8名

部署名	総務課	学長室 広報課	人事部	通務研究センター	地域交流センター	通信教育部	明星教育センター	合計
訪問予定グループ数	26	9	25	25	18	6	33	364

2018年度後期科目「自立と体験3」授業実施報告

《Summary》

- 2018年度は、演習の進め方と内容、教材(第4～14回)に一部改訂を加えて実施した。改訂した点については、受講生および担当教員より概ね支持を得られた。
- 最終的な履修者は147名(2017年度:194名)であった(全大附者13名を除く)。平均出席率は74.0%(2017年度:76.2%)、単位修得率91.2%(2017年度:88.8%)、133名(2017年度:129名)であった。
- 終了時アンケートによると、85%以上の学生が行動目標・到達目標を達成したと考え、授業を通じた能力の伸長及び意識の変化を自覚し、99%が授業に満足していた。また、自立と体験4を履修したい学生は40%(2017年度:38%)となり、自立と体験4への動機付けとなっていることが伺える。
- 次年度への課題としては、授業内容と社会人基礎力育成との繋がりが、十分に時間をかけた問題解決の方法に対する取り組み、「自分の問題」に関する副次的な問題(過度な自己開示など)の対処方法、明星LMSの積極的な活用、が挙げられた。

1. 授業概要

1.1 教育目標

チームで様々な課題や演習に取り組むことを通じて、

- (1) 論理的に考え表現することを学ぶ。
- (2) 問題を発見し解決することを学ぶ。
- (3) 大学生活でも役に立つ「社会人基礎力」を伸ばす。
- (4) 自分の持ち味を知り、将来のキャリアを考えるきっかけとする。

1.2 行動目標・到達目標

- (1) 自ら考えで行動し、主体的に学ぶ。
- (2) 問題や問題意識の持ち方を理解し、問題解決の考え方を身に付ける。
- (3) 社会に対する関心を高める。
- (4) 自分の思い、考えなどを適切に表現する。

1.3 授業内容

2018年度は、2017年度「自立と体験3」の課題を受けて、シラバス・教育内容に一部改訂を加えた。また、演習内容・教材においても一部改訂を行った。
また、前年度からの課題である「明星大学独自のキャリア教育の確立に近づけていく」ことに加え、「より社会人基礎力(明星大学バージョン)を意識したプログラム」で開講することを旨とした(授業内容:資料2)。
主な改訂ポイントは以下のとおりである。

- (1) 問題解決法の理解と定着を図る方法の検討

最初に、「社会の問題」をテーマに据え、問題を発見し、複数の問題解決の方法を活用しながら、解決していくプロセスを学ばせることにより、問題解決のプロセスを理解させた。次に、「自分の問題」をテーマとし、問題解決のプロセスの理解を深化・定着していくことができるようにプログラムの再構成を行った。

- (2) 社会的なテーマへの意識・関心を高める取組みの検討

授業の重層を入れ替え(2017年度は「自分の問題」から「社会の問題」、2018年度は「社会の問題」から「自分の問題」)、社会的な問題を考えるヒントとなる資料を配布し、より深く考えることを促す授業構成にした。その際に、選んだテーマをより自分ごととして考えられるように工夫した。

- (3) 社会人基礎力と授業内容との関連の強化

ワークブックの授業内容と社会人基礎力の育成との関連が、学生も教員も意識できるように、各授業回の冒頭に「社会人基礎力宣言」をワークブックに記入させるように改訂を行い、より社会人基礎力を意識させるプログラム構成にした。

- (4) チーム活動の担保

チームでの議論の深化を目的として、「社会の問題」の取り組み方(問題を発見すること)「問題解決のプロセスを踏まえること」などを重視する)の変更を行った。

2. 実施結果

2.1 設置クラス数

2年生後期科目として9クラスを開講した。開講時間は月曜5限・火曜5限・水曜5限・木曜3限・金曜5限とし、木曜3限、金曜3限は複数クラスを設置した。

授業は明星教育センターの8名の教員が担当した。1クラスあたりの履修学生数は、10～25名ほどであった。

2.2 履修者数及び単位修得状況

開講に先立ち、授業内容告知のチラシを配布し、全学科に対して履修ガイダンスで授業内容の説明を行った。

前期履修登録時の履修者数は211名、最終的な履修者数は147名であった(全大附者13名を除く)。最終的な履修者は、2017年度(154名)より7名減少した。進級・卒業要件に含まれる学科の履修者数は、デザイン学科(0名/学籍番号14.15番台のみ)、国際コミュニケーション学科(64名)、経済学科(40名)、心理学部心理学科(4名)であった。自由科目として履修した学生は52名であった。

単位修得率は91.2%であった。履修者の所属学科及び単位修得状況の詳細は表1に示す。

ち方を理解し、問題解決技法を身につけた」、Q7「社会に関心が高めることができ、Q8「自分の思い、考えなどを適切に表現することができた」のいずれにおいても、「とてもそう思う」「そう思う」を合わせた肯定的な回答が85%を超えており、多くの学生が本授業の行動目標・到達目標を達成できたと考えていることが示された。

3.2 能力の伸長及び意識の変化

「獲得した能力や意識」について、履修時に期待していたことがどの程度達成されたかを4件法で尋ねた。その結果、Q9「スキルが身につく」、Q10「意識や行動が変わる」、Q11「大学生活や将来の役に立つ」のいずれの項目についても「達成された」、「やや達成された」の合計が85%を超えており、多くの学生から肯定的な回答を得られた。

スキルや意識の具体的な内容は、自由記述において「文章力」、「会話力」、「自分で考え解決するスキル」、「発信力」、「傾聴力」、「コミュニケーション力」、「実行力」、「問題解決スキル」、「考える能力」、「プレゼンテーション力」等が挙げられた。

3.3 学生の反応

授業に対する満足度について、終了時の授業アンケートにおいて4件法で尋ねた。Q1「あなたはこの授業に出席してどのように思いましたか」に対して「良かった」、「やや良かった」を合わせた回答が99% (2017年度:98%)、Q3「あなたはこの授業を後輩にも勧めますか」に対する「大いに勧めたい」、「勧めたい」の合計が99% (2017年度:98%)であり、学生の受講後の授業評価はかなり高いものとなった。

その理由として自由記述より、「グループワークなど普段接していない人達と関わることが良かった」、「自分自身に不安がある程、成長したと実感できる」、「自分のためにもなるし、楽しく社会に触れることができる」、「参加すれば何かしら得られる」、「論理的に考えるのが苦手」という学生はぜひ受けたい、「自立と体験1をもう1度やりたい」と思っている後輩がいたとしたら、それよりも深い学びが出来るよという風に勧めたい、「自己を見つめ直し、他学部と関わる良いチャンス」等の理由が挙げられる。なお、否定的な回答として「単位にはならないので、スケジュールがざりざりの人には勧めたくない」という指摘があった。

取り組み状況については、Q2「あなたはこの授業にどのように取り組みましたか」において、「非常に積極的に取り組めた」が30% (2017年度:27%)、「積極的に取り組めた」が56% (2017年度:46%)、「まあまあ取り組めた」が14% (2017年度:26%)、「出席したがあまり積極的に取り組めなかった」は0% (2017年度:1%)となり、2017年度より改善されている。

また、Q4「来年度の自立と体験4を履修するか」という問いに対しては、「履修したい」は40% (2017年度は33%)、「どちらともいえない」が43% (2017年度は65%)となり、2017年度と比較して改善されており、「自立と体験4」への動機付けとなつていことが伺える。一方、「履修したくない」が9% (2017年度:2%)に増加したが、その理由は「卒業するから」「履修済み」とするもので、授業内容を低く評価したものではない。無回答(8%)は4年生の履修者が原因であると思われる。

3.4 教員から見た評価

担当教員からは以下の指摘があった。

- (1) 2017年度からの改善点について
 - 各回授業の冒頭に、社会人基礎力を意識させるワークを取り入れたこと、第4～6回 (問題解決の方法)、第7～9回 (問題解決演習 基礎)、第10～12回 (問題解決演習 発展) の教材を進め方を大幅に改訂したこと、ワークブックの内容を改訂したことについては、「学生の考える力が深まった」、「社会人基礎力の理解が進んだ」という意見が示され、概ね肯定的であった。

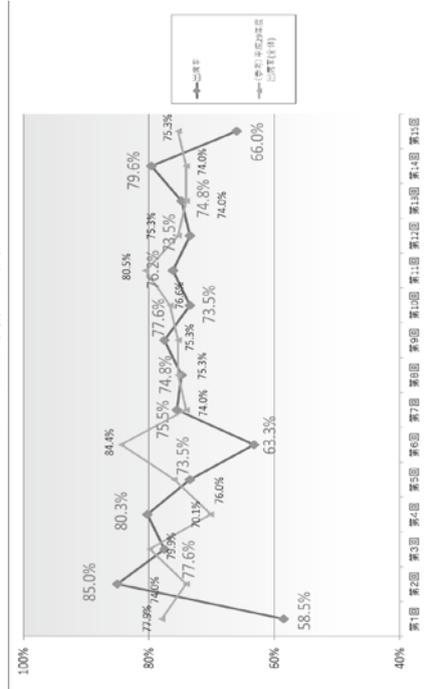
表1 2018年度学科別履修者数及び単位修得状況(全欠席者除く)

学部学科名	総計	単位取得者数	単位修得率
理工学部 総合理工学科	16	14	87.5%
人文学部 国際コミュニケーション学科	63	58	92.1%
人文学部 日本文化学科	4	4	100.0%
人文学部 人間社会学科	1	1	100.0%
人文学部 福祉実践学科	-	-	-
経済学部 経済学科	38	37	97.4%
情報学部 情報学科	4	4	100.0%
教育学部 教育学科	3	3	100.0%
経営学部 経営学科	3	3	100.0%
デザイン学部 デザイン学科	12	7	58.3%
心理学部 心理学科	3	3	100.0%
総計	147	134	91.2%

2.3 出席率

平均出席率は74.0%、最高は85.0% (第2回)、最低は58.5% (第1回)であった(全欠席者を除く)。出席率の詳細は図1のとおりである。

図1 2018年度 出席率

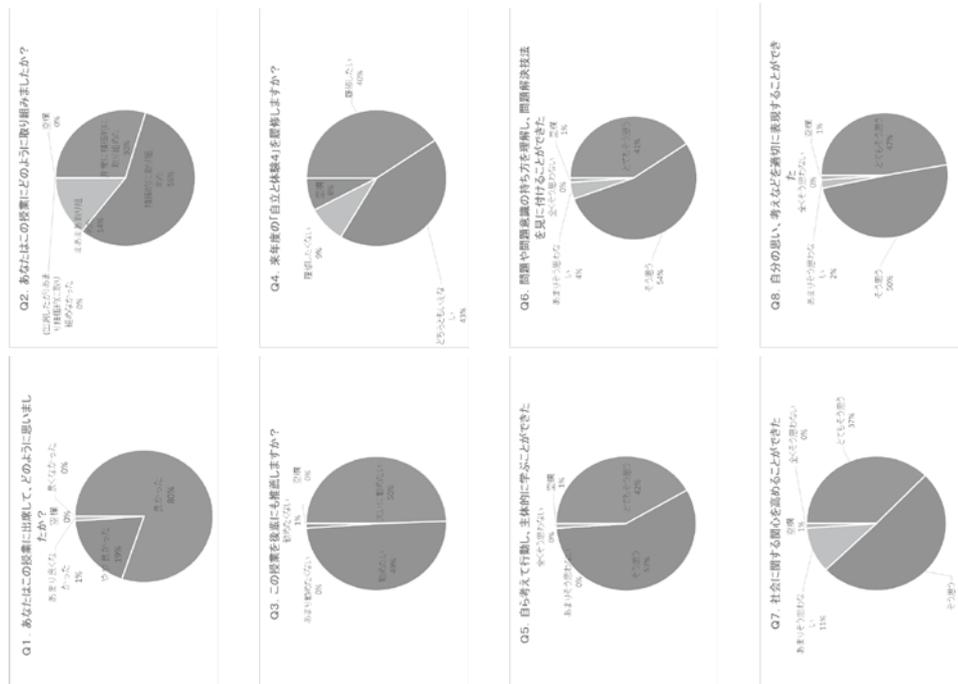


3 授業評価

3.1 教育目標の達成

「行動目標・到達目標」に関し、終了時の授業アンケート(資料1)において達成度を尋ねた。Q5「自ら考えて行動し、主体的に行動することができた」、Q6「問題や問題意識の特

資料1 授業終了時アンケートの集計結果 (N=91)



- 一方で、「全体を通して盛りだくさん、積み残し感がある」、「授業の進め方に戸惑いがあった」等の意見が示された。特に第7～9回については、「丁寧な展開は良かったが、時間内に収まらない」「教材や進め方について改善が不十分。学生が消化不良であった」という意見が示され、授業の構成や進め方について更なる検討が必要である点が明らかになった。

(2) その他の授業に関する事項

- 各回授業の冒頭で社会人基礎力を意識させることができた。
- 問題解決の方法の理解と定着が難しかった。より理解しやすい工夫が必要である。
- 社会的な問題として設定された内容が深まった。大きなテーマを設定した場合、解決策を提示することが難しかった。
- ワークブックの持参が徹底されず、教材を十分に活用できなかった。
- ワークシート類は細かく設定されて使いにくい部分もあった。
- 社会人基礎力とカリキュラムとの関係をより明確に示す工夫が欲しい。

(3) 学生の状況

- グループ活動を通じてより深く考えようとする意識が醸成できた。
- 関心姿勢、フィードバックが回を追う毎に良くなっていった。
- ディスカッションで自己開示が進んだ。
- 成長感を感じる学生が多かった。
- 授業の取り組み姿勢の温度差がある。年度、クラスによっても学生の取り組み姿勢や出席状況はだいぶ異なるため、クラスの状態に応じて柔軟に対応できるプログラムが必要である。

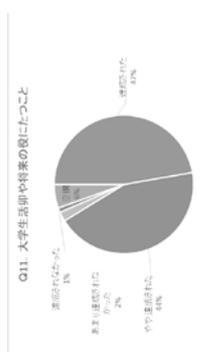
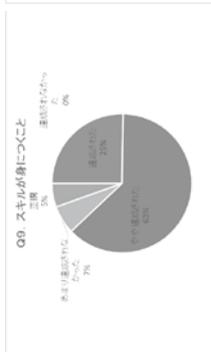
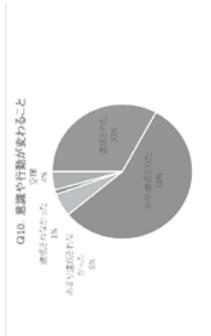
4 次年度に向けての課題

- (1) 授業内容と社会人基礎力育成との繋がりをより強く意識した授業プログラムの検討
 - 各回の授業内容と社会人基礎力育成との繋がりについて、学生も教員もいままですら以上に強く意識できるように構成にする。
- (2) 「社会の問題」について、問題解決のプロセスに時間をかけて取り組めるような余裕をもった時間配分にする
 - 「社会の問題」を扱う授業回が3回(2018年度)では不足することから、2019年度は4回を増やし、時間をかけて取り組めるように工夫する。
- (3) 「自分の問題」に関する副次的な問題の対処方法の検討
 - 「自分の問題」が深く議論されたことよって現れた副次的な問題(例えば、他の学生に知らせてしまったのも良い問題なのか、といった極めて個人的な問題など)に対する対処方法を工夫する。
- (4) 明星LMSの積極的な活用
 - レポート課題等の提出に明星LMSを積極的に活用する。

以上

資料2 2018年度 自立と体験3 授業内容一覧

回	授業名	授業のねらい	主な授業内容
1	オリエンテーション 授業全体の概要	「自立と体験3」に興味を持つ ・授業への取り組み方を理解する	1. 授業のねらいと内容の紹介 2. 自立と体験3の特徴に陥れる 3. 自立と体験3の特徴を知る 4. 振り返り
2	チーム活動の進め方 (チームで協力して活動する)	・チームで協力して活動する体験をする ・チームで話し合い発表をまとめるポイントを理解する ・チーム活動に必要なポイントを理解する	1. ウォーミングアップ 2. 大学生活を振り返る 3. ティスカッションと発表演習 4. チーム活動の振り返り 5. 振り返り
3	表現技法1 (論理的に考え表現する)	・自分の意見を論理的に述べる ・相手の意見を整理して聞く ・他者の意見を聞いて意見を述べる	1. ウォーミングアップ 2. 個人目標設定 3. 論理的に話す 4. 意見を述べる 5. 振り返り
4	問題解決の方法1 (情報を集める)	・問題解決について理解する ・情報収集の方法を学ぶ	1. ウォーミングアップ 2. 問題解決とは何か 3. 情報収集の入り口 4. 情報収集のポイント 5. 情報収集の方法を学ぶ 6. 振り返り
5	問題解決の方法2 (情報を整理する基礎)	・情報を整理する手法(フレイムワーク)を学ぶ ・学んだ手法を用いて実際に情報を整理してみる	1. ウォーミングアップ 2. 情報分析とは 3. フレイムワークを活用する 4. 振り返り
6	問題解決の方法3 (情報を整理する応用)	・問題解決のプロセスを体験する ・問題解決の「見える化」を試みる ・条件設定と解決策の関係を理解する	1. ウォーミングアップ 2. 拡散思考と収束思考 3. 問題解決の実践 4. 振り返り
7	問題解決演習 <基礎1> (社会の問題を身につける)	・資料から問題を発見する	1. ウォーミングアップ 2. 授業の進め方の理解とグループ作り 3. 問題発見ワーク 4. まとめと振り返り
8	問題解決演習 <基礎2> (社会の問題の解決策を構想する)	・情報分析の体験をする ・情報分析について理解を深める	1. ウォーミングアップ 2. 各チームの情報共有 3. 情報分析体験 4. 課題の設定(原因の特定) 5. 振り返り
9	問題解決演習 <基礎3> (社会の問題を議論する)	・解決策の構想を体験する ・解決策の構想について理解を深める	1. ウォーミングアップ 2. 拡散思考と収束思考(復習) 3. 前時の振り返りと課題の確認 4. 解決策の構想体験 5. レポート作成の準備と宿題の説明 6. 振り返り
10	問題解決演習 <発展1> (自分の問題を議論する)	・問題解決の基礎で学んだことを、演習を通してさらに深める ・自分の問題をとり上げて具体的に考える	1. ウォーミングアップ 2. 問題解決演習(基礎)の振り返り 3. 問題解決演習(発展)の準備 4. 問題発見 5. 情報収集 6. 振り返り



11	問題解決演習 ＜発展2＞ (自分の問題を見つ ける)	<ul style="list-style-type: none"> 問題解決の基礎で学んだことを、演習を通してさらに深める 自分の問題を取り上げて具体的に考える 	<ol style="list-style-type: none"> ウォーミングアップ 問題解決演習(基礎)の振り返り 問題解決演習(発展)の準備 問題発見 情報収集 振り返り
12	問題解決演習 ＜発展3＞ (自分の問題を議論 する)	<ul style="list-style-type: none"> 問題解決の基礎で学んだことを、演習を通してさらに深める 自分の問題を取り上げて具体的に考える 	<ol style="list-style-type: none"> ウォーミングアップ 糸通の振り返り 解決策の構想 行動計画の策定 個人プレゼンテーションの進め方 振り返り
13	養育技法2 (プレゼンテーション の実践)	<ul style="list-style-type: none"> 効果的なプレゼンテーションの行い方を学ぶ プレゼンテーションを作成し、実施する 他者のプレゼンテーションを評価する 	<ol style="list-style-type: none"> ウォーミングアップ プレゼンテーションの説明と作成 プレゼンテーションの実施 振り返り
14	養育技法3 (プレゼンテーション の実践とふりかえり)	<ul style="list-style-type: none"> プレゼンテーションを実施する 他者のプレゼンテーションを評価する 問題解決演習を振り返る 	<ol style="list-style-type: none"> ウォーミングアップ プレゼンテーションの実施 個人の問題解決の振り返り 振り返り
15	キャリアデザイン (今後の行動を考え る)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の強みを知る キャリアデザインの考え方を知る 今後の行動計画を立てる 	<ol style="list-style-type: none"> ウォーミングアップ チームの中で自分を振り返る キャリアデザインの考え方を 今後の行動計画を立てる 振り返り

以上

2018年9月20日

明星教育センター

2018年度「自立と体験4」実施報告書

Summary (概要)

- ・本年度は8クラスで開講し、履修者は144名であった。(昨年度は7クラス120名)
- ・単位修得率は90.9%(昨年度96.6%)、出席率は77.6%(昨年度82.4%)といずれも昨年度を下回る結果となった。
- ・受講者アンケートでは「この授業によって自己理解が深まり、将来や就職に向けて考えるきっかけとなった」と多くの学生が回答している。
- ・昨年度からの課題として「クラス人数に合わせた弾力的な授業運営については20名クラスを標準としての教養をベースに、各授業の最終成果の共有化をはかりつつ担当教員が弾力的な授業運営を行なった。
- ・また同様に昨年度から課題であった「3年後期以降の行動につながるプログラム」については、受講者アンケートの回答通り自己理解や動機づけは進んだ半面、自分自身の卒業後の進路についてイメージ出来ている学生はまだ過半数に達していないことから、まだまだ自分の具体的な行動に落とし込むレベルには至っていない学生も多いと考えられる。
- ・昨年は基礎的な文章力をつけるためにレポート提出を一回実施したが、本年度はそれに加え後半に、授業の学びを総括するレポート提出を実施した。授業の振り返りへの効果も有効であった。
- ・次年度については、基本的なプログラムは踏襲しつつも
 - ① 就労観を高めるための仕掛け強化
 - ② 社会人に向けての基本的な力と態度の強化と発揮
 - ③ 3年後期以降の行動につながるプログラム
 等、受講者レベルや志向を勘案した授業運営を推進していく。

1. 授業概要

1.1 教育目標

- (1) 自己実現を目指し、職業を持つ社会人として自立できる能力と意欲を育てること。
- (2) 生涯を通じての継続的な学習意欲と就業力を育てること。
- (3) キャリア教育の最終段階として、具体的に自らの将来像、仕事、就職について考える力と意欲を身につけること。

1.2 行動目標・到達目標

- (1) 自らの課題を設定し、主体的に学ぶこと。
- (2) 就職活動の前提となる意識とスキルを身につけること。
- (3) 社会人の考え方に触れ、働くイメージや就業観を身につけること。
- (4) グループでの話し合いを通じて、自己を見つめ自己表現力を高めること。

1.3 授業内容

昨年同様、各授業の繋がりが分かりやすくなるように毎回の授業の最初にその日の授業内容の説明を行った。(図1参照。全15回の授業内容詳細は、資料1を参照。)
 その他、昨年度からの主な変更点は下記の通りである。
 ・「企業価値」について多様なステークホルダーの視点から多角的に考えるプログラムを新たに追加した。
 ・ジョブインタビュー終了後の就労観が高まることを想定して、後半に自己の強み分析(自己アビールのポイント)や仕事に求められる能力についての授業回を移行した。
 ・昨年度までの基礎文章力を高めるレポート提出に加え、授業の学びをまとめるレポート提出を追加実施した。

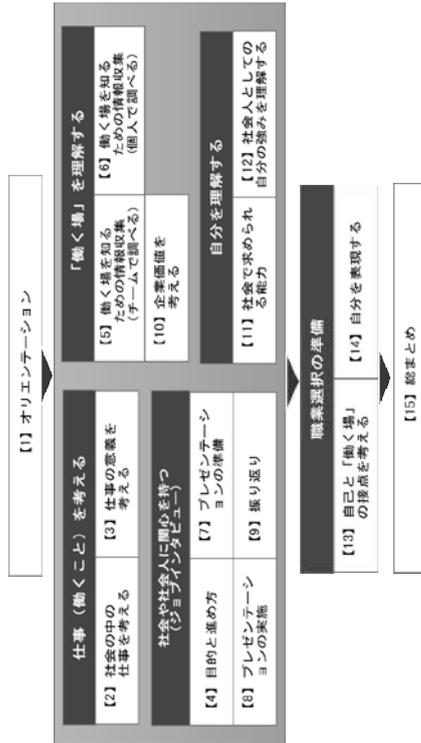


図1 「自立と体験4」授業内容

2. 実施結果

2.1 開講曜日・時間

3年生前期科目として、明星教育センター特任・常勤教員6名で8クラスを開講した。うち1クラスは2名の教員で共同担当した。国際コミュニケーション学科、経営学科の2学科が学科科目に読み替えの措置を行った。授業の開講曜日時間は表1の通りである。

開講曜日時間	教員数	人数	開講曜日時間	教員数	人数
月曜日3限(2)	各1名	41	木曜日3限(2)	各1名	51
月曜日5限(1)	1名	7	金曜日3限(1)	2名	30
火曜日5限(0)	1名	—	金曜日5限(1)	1名	6
水曜日5限(1)	1名	9	全体(6クラス)		144

※履修者人数は、4月25日(水)現在のものである。
 ※協同学習の効果を高めるために開講時人数が6名未満のクラスについては他のクラスに移動を依頼した。結果、本年度は当初予定していた火曜日5限は開講しなかった。

2.2 履修者数及び単位修得状況

2018年度の履修者数は、144名であった。昨年度の120名と比べて若干増加した。学部学科別の履修者数は表2の通りである。単位修得者は131名で、単位修得率は90.97%だった。

表2 学部学科別履修者数と単位修得者数

学部学科名	2018年度		2017年度	
	履修者	単位修得者	履修者	単位修得者
理工学部総合理工学科物理系	4	2	0	0
理工学部総合理工学科生命科学・化学系	0	0	0	0
理工学部総合理工学科物機理工学系	1	0	0	0
理工学部総合理工学科電気電子工学系	2	2	1	0
理工学部総合理工学科建築学系	0	0	1	1
理工学部総合理工学科環境・生態学系	0	0	1	1
人文学部国際コミュニケーション学科	61	56	31	29
人文学部人間社会学科	0	0	0	0
人文学部心理学科	1	1	5	4
人文学部日本文化学科	3	3	2	2
人文学部福祉実践学科	0	0	2	1
経済学部経済学科	67	62	57	57
情報学部情報学科	1	1	2	2
教育学部教育学科	3	3	5	5
経営学部経営学科	1	1	0	0
デザイン学部デザイン学科	0	0	13	12
心理学部心理学科	0	0	0	0
総計	144	131	120	114
単位修得率	90.97% #1		96.61% #2	

※1 履修登録者144名のうち授業に1度も出席していない学生はいなかった。
 ※2 履修者120名から全欠席者および退学者2名を除いた118名で計算している。

2.3 出席率

2018年度の出席率の平均は77.6%だった。昨年度の82.4%と比較すると4.8ポイント下落した。最も高かったのは、第1回目の86.1%、最も低かったのは第10回・第15回目の66.0%であった。授業毎の出席率は図2の通りである。

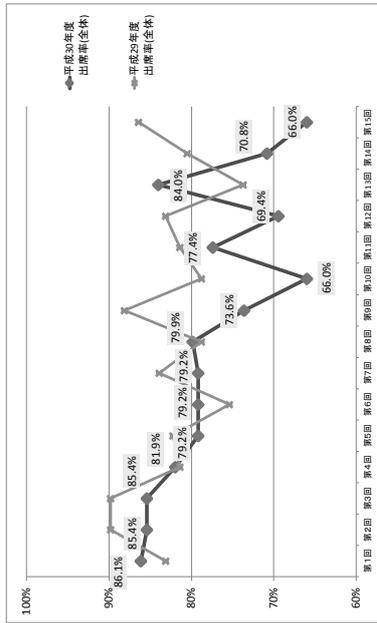


図2 2018年度 出席率

*第10回目の下落要因として第9回にジョブインタビューが終了し、出席調整をした学生がいた可能性がある。また、第15回目の下落原因として2クラスが授業期間終了後の補講にしたことが考えられる。

3. 授業評価

3.1 授業アンケート

授業改善を目的として、第15回授業時に、出席者に対して「自立と体験4」オリジナルの学生アンケートを記名式で実施している。下記、授業アンケートについて考察する。

なお、図の作成にあたっては、無効回答を除いている。

(1) 授業評価

受講後アンケート回答者の99%(昨年99%)が、「自立と体験4」の授業へ参加して良かった、やや良かった」と肯定的に回答した。

その中でも自由記述欄には、この授業によって自己理解が深まり、将来や就職に向けて考えるきっかけとなったと多くの学生が回答している。具体的には、「(今更ながら)『このままじゃまずい』と感じた」「将来の事について職業選択をしつかり考える必要があると深く感じた」「仕事のやりがいとは何か、就職活動に必要な事を知ることが出来た」「自分の事についているんな視点で再整理できた」「自分の過去や経験を将来に繋げて考えることができた」「自身がどんな働き方をしたいのか再認識できた」「他の授業にはこういった学習ができないのだからやりがいを感じた」「他学部の人とのグループワークは刺激的であった」等の記述があった。

また「この授業を先輩にも推薦したいか?」との質問に対して「大いに勧めたい」と

- も高まったようである。
- ・第5回「働く場を知るための情報収集」については、与えられた課題企業について、各種の情報源からグループで協力して情報を集め、組み合わせるワークを行ったことで多面的な企業理解につながったようだ。また情報収集ツールとして昨年から学生に配布している『業界地図』が好評であった。
 - ・第10回「企業価値を考える」では、働く人という視点のみでなく多様なステークホルダーから企業価値を考えるプログラムを展開したが、限られた時間での内容としてはやや消化不良となり、次年度以降改善が必要な課題となった。

(2) 運営面について

- ・例年同様、クラスにより履修者数のばらつきがあったことにより、少人数クラス(6名程度)では、課題に丁寧に向き合うことができ充実した内容ができた反面、グループ等協同学習による学びが少ない面も見られた。
- ・例年同様に基本的文章力を載えるために、外部講師にレポートの添削を依頼した。本年度は本学から外部講師へ具体的な採点指標を示したが、点数とコメント内容に乖離があるように見受けられたため、本学と外部講師との認識の乖離を埋める必要がある。また今年度は上述レポートに加え、後半(第13回目)に「職業選択で大切にしたいこと」をテーマに学生へレポート提出を求めたが、授業内容と自分の結論点をまとめる点に苦与したと考えられる。

4. 次年度に向けて

次年度の授業実施に向けて、下記の3点について今後検討をしていきたい。同時に、新たな「自立と体験2」との結論についても検討しつつ受講者レベルや志向を勘案したプログラム再構築を図るきっかけづくりとしていきたい。

- (1) 就労観を高めるための仕掛け強化
「働くことのやりがい」や「働くことの必要性」など多様な観点で受講生の興味や関心をリアルにとらえたプログラムを検討する
- (2) 社会人に向けての基本的な力と態度の強化と発信
出席や授業態度は勿論。授業内での自ら共同ワークを率先垂範する態度、レポート提出など決められた事項の遵守、など当たり前のことを当たり前に出来る習慣づけを高める。
また、授業内容に関するレポート提出を通じて基本的な文章力の向上を高めていきたい。
- (3) 3年後期以降の行動につながるプログラム
協同学習の充実及び授業内でリーダシップをはじめとする他者との関わりを通じて学生自身が将来に向けてどのような一歩を歩んでいきたいのかをベースに、社会人スタートに向けて3年後期以降の具体的な行動につながるプログラムへの充実(気づきの増幅と個の計画化)を考えたい。

以上

いう積極的な肯定回答が62%(昨年48%)と増加した。
特に印象に残った授業として例年同様ジョブインタビューに関する各種取り組みに対するコメントが多く、「対象者の設定」「インタビューの質問の組立て」「インタビュー自体での情報収集」「プレゼンテーション」「他者の発表へのコメント」等を通じて多くの学習をしたことを記述していた。

(2) キャリア意識、仕事・職業意識

仕事・職業意識を深め、自分自身に引き寄せて仕事や将来について考えることについては、「様々な仕事について理解が深まった」との質問に対して肯定的回答した学生は97%(昨年97%)、「自分にとってのやりがいや働く意識がはつきりしてきた」への肯定的回答は80%(昨年86%)、「自分にあった職業を探したいと思うようになった」への肯定的回答は97%(昨年99%)という結果であった。その中でも、「この授業に出席して就職に対する意識が高まった」「様々な仕事についての理解が深まった」「自分について新たな発見があった」についてはそれぞれ積極的な肯定回答(とてそう思う)がそれぞれ昨年度より10ポイント以上高い結果となった。

(3) 獲得した意識と能力

この授業を通して伸びたと思うスキルについての質問(複数回答)では、聴く力(54%)、チーム活動(40%)、プレゼン力(39%)、情報収集の仕方(39%)が高かった。
【資料2】参照

(4) その他

卒業後の進路は、イメージできていないと回答した学生が48%と、半分以上の学生が卒業後の進路についてまだイメージできていなかった。また、この夏休み、76%の学生がインターンシップに参加したいと回答している。「この夏休み、インターンシップ以外で就職活動のための計画していることがあるか」については「ある」との回答は27%にとどまり、まだまだ具体的な行動につなげていないことが窺える。インターンシップ以外でこの夏休みに取り組みたいこととして、筆記試験やSPI、資格取得のための勉強などがあがっていた。
受講のきっかけ(複数回答)については、「自立と体験3を受講したから」と回答した学生が32%と最も高く、次に「就職活動に不安があった」と回答した学生が21%、「自分の可能性を伸ばしたかった」と回答した学生が18%であった。

3.2 教員からの評価

担当した教員から授業内容や運営面について以下の指摘があった。

(1) 授業内容について

- ・ジョブインタビューの取り組みについては、自分の興味のある仕事や業界についてインタビューをするために依頼者探しや実施計画に時間をかけた学生が多かった。自分で計画し、アポイントを取り、インタビューをし、プレゼンをするという一連の流れを通して主体的に取り組み意識が醸成されていた。また、メンバーの発表にも関心を持ち相互に意見や質問を交わす中で、自分の興味領域の仕事以外への関心

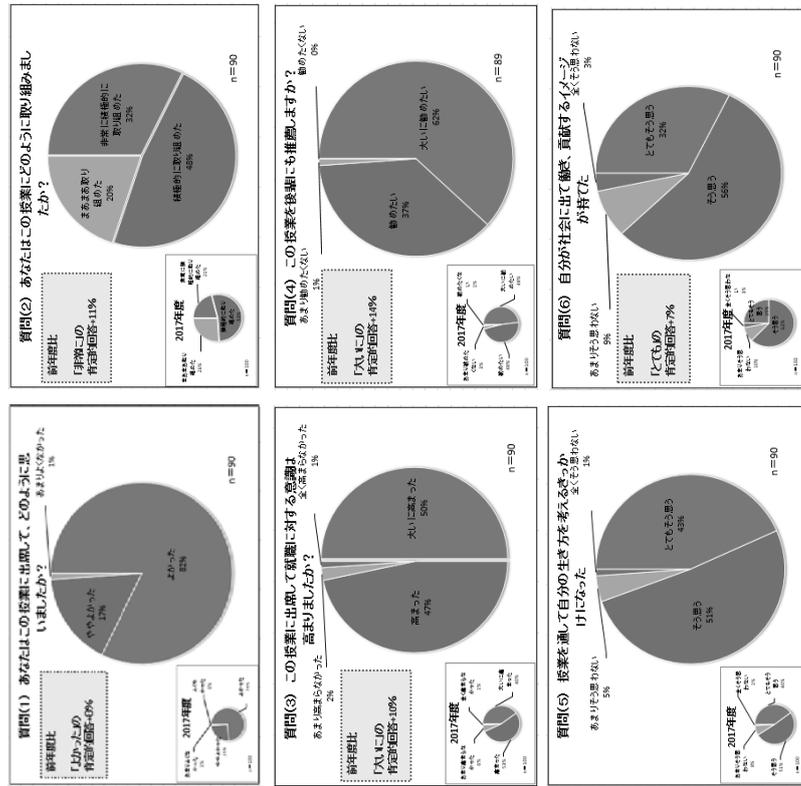
【資料1】2018年度「自立と体験4」授業内容

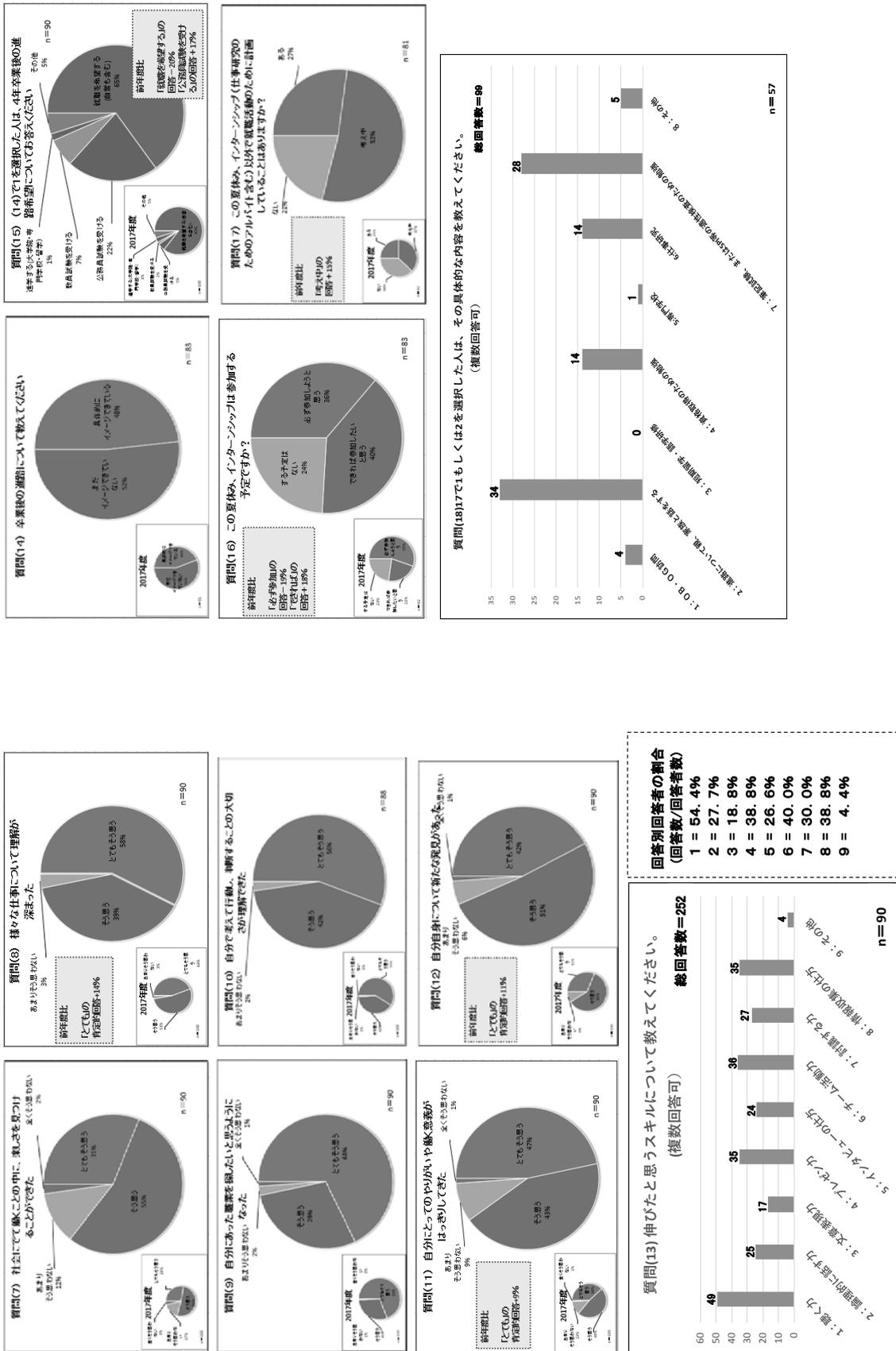
回	授業名	内容
1	オリエンテーション 【授業全体の概要】	ねらいを理解する ゴールをイメージする
2	社会の中の仕事を考える	社会と仕事の繋がりを知る 社会の中の仕事を考える
3	仕事の意義を考える	自分が仕事をすることについて考える
4	ジョブインタビュ-1	ジョブインタビュ-準備 質問力を身につける
5	働く場を知る為の情報収集 【チームで調べる】	情報収集の方法を知る 「働く場」と仕事を知る
6	働く場を知る為の情報収集 【個人で調べる】	情報収集の方法を知る 「働く場」と仕事を知る
7	ジョブインタビュ-2 【プレゼンテーションの準備】	プレゼンテーションの基本理解
8	ジョブインタビュ-3 【プレゼンテーションの実施】	様々な人の仕事観を探る。プレゼンテーションの体験
9	ジョブインタビュ-4 【振り返り】	ジョブインタビュ-を振り返る
10	企業価値を考える 【企業を多角的に考える】	どんな価値をどんなステークホルダーに提供しているか
11	社会で求められる能力	社会で求められる能力を知り、自分の持ち味の現状理解
12	社会人としての自分の強みを理解する	自分の強み理解し、他者との違いから特徴を見出す
13	自己と「働く場」の接点を考える	主体的に情報収集する グループディスカッション体験
14	自分を表現する	現在の自分を表現する 将来の自分を表現する 模擬面接を体験する
15	総まとめ	今後の方向性を考える・アクションプランを作成する

【資料2】2018年度「自立と体験4」アンケート結果

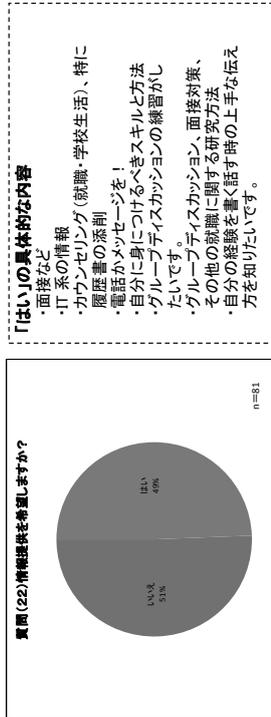
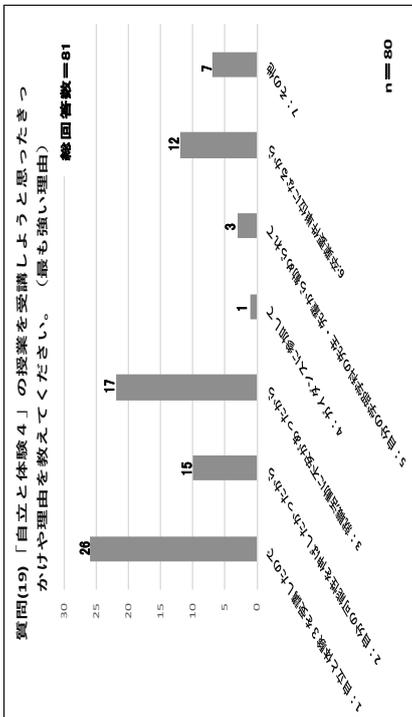
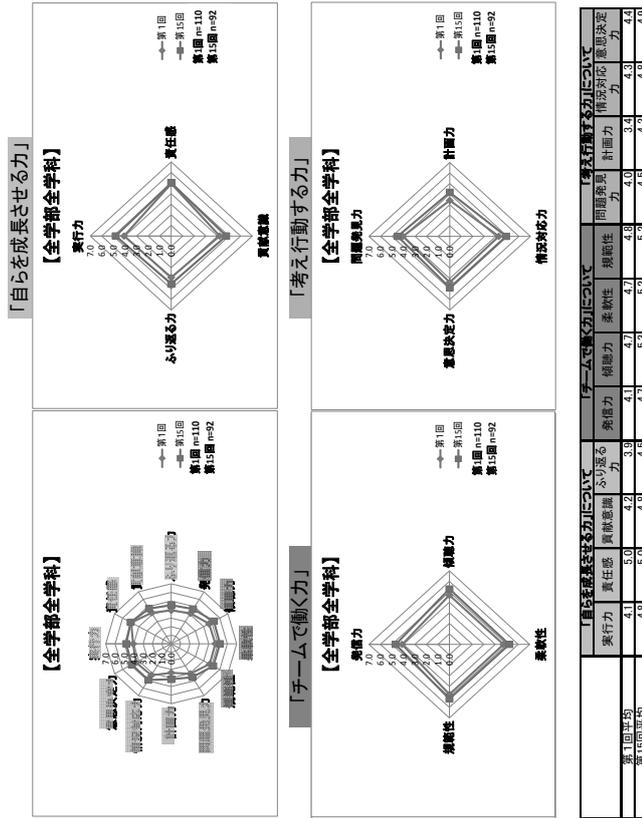
第15回目に、今後の就活フォロー希望者を確認するため、記名式でアンケートを実施した。履修者144名のうち、回答者は90名だった。また、図の作成にあたり、未提出者・無回答者は除いている。

なお、昨年度と+5ポイント差がある項目については、コメントをつけている。





【資料3】2018年度「自立と体験4」社会人基礎力自己判定



「はい」の具体的な内容

- 面接など
- IT系の情報
- カンパシーニング(就職・学校生活)、特に履歴書の添削
- 電話かメッセージを!
- 自分に身につけるべきスキルと方法
- グループディスカッションの練習がしたいです。
- グループディスカッション、面接対策、その他の就職に関する研究方法
- 自分の経験を書く話す時の上手な伝え方を知りたいです。

学長 大橋 有弘 殿

2019年3月13日・学部長会資料

担当副学長・明星教育センター長 菊地 滋夫
 (明星大学明星教育センター運営委員会 協議済み)

授業実施報告書「キャリアデザイン1」(2018年9月～2019年1月)

Summary (概要)

- 今年度の「キャリアデザイン1」は、1クラスで開講し履修者は61名であった(全欠席者・休学者除く)。平均出席率は73.0%、単位読み替えのある学科のみの出席率は、第9回と第15回を除き、80%以上を維持していた。単位修得率は75.4%(46名)であったが、単位読み替えのある学科91.0%に対して、その他の学科は57.1%であった。
- 終了アンケートでは、授業の到達目標達成について、意識の醸成、キャリアデザインに関する知識・方法の獲得は90%以上の学生が、学習内容の日常生活での活用は80%の学生が肯定的に回答した。「授業に出席してよかった」「この授業を後輩に推薦したい」に肯定的に答えた学生は、ともに92.3%と満足度も高かった。
- 全体として、学生たちは、興味のある心理やコミュニケーションやキャリアについて学び、自分を見つめ直し、就活や将来に向けて前向きな気持ちになった。また、他学年や他学部の人と対山話すことができ、その体験を楽しみ、自分のためになると感じていた。
- 次年度への課題として、①授業内容のブラッシュアップ、②グループワークの質を高める働きかけの継続、③SAの活用、が挙げられる。それにより、授業の質を高め、学生の主体的な学びを深めていきたい。

1 授業概要

1.1 教育目標

- (1) キャリアデザインの理論学習に基づき、キャリアの考え方を知る
- (2) 個人ワーク、グループワークを行い、自身の勤労観・職業観を育成する
- (3) 社会に出て働くことの様々な側面について知る

1.2 行動目標・到達目標

- (1) 卒業後に社会人として活躍していくために必要な意識が醸成される
- (2) キャリアに関する知識や理論を学び、自身のキャリアを考える方法が身につく
- (3) キャリアについての考え方を、他者に説明できる

1.3 授業内容(前年度からの変更点・工夫をした点)

- (1) 2017年度を終えての課題として、①学習したことが、「活用できる」「役立つ」と感じる仕掛け、②グループワークの質を高める働きかけの導入を挙げ、授業内容やワークシート類を工夫した(大きな改善点としては、(2)～(6)を実施した)。
- (2) 前年度、「良かった授業回」というアンケートでも取り上げられなかった授業回(「人の生涯に関わる発達」「コンピテンシー」)については、キャリアを考えること紐付けた説明を行うことにより、そのテーマを学ぶ意図の理解を促した。
- (3) 行動目標である「キャリアについての考え方を、他者に説明できる」の促進を意図して、レポート課題において、「他者の意見を取り入れて書く」という条件を設定した。
- (4) ディスカッションが深まらないことへの対処として、ワークシートに「自分の意見」「メンバーの意見」「(向者を踏まえた)グループとしての意見」を書く欄を設け、互いの意見を基に話せるように工夫した。
- (5) 毎時の態度目標として「コミュニケーション課題」を設定した。
- (6) 4人グループが基本であるが、3人グループの回も設定し、話しやすい座り方を検討した。

2 実施結果

2.1 開講曜日・時限・設置クラス等

2018年度も1クラス開講(後期金曜3限)とし、2名の教員による分組で実施した。それにより、昨年度学生アンケートでも評価の高かった「多様性のあるクラス状況」を確保した。今年度は当初86名が履修登録を行ったため、例年と同様にSA(学部4年生)を1名採用し、授業のサポート役を担ってもらった。

2.2 履修者数

後期の履修訂正期間を経て、履修者数は76名(2017年度115名、2016年度77名)となった。詳細は以下表1の通り。

履修者67名中、15回全欠席者4名、中途休学者2名を除いた実履修者数は61名(2017年度108名)である。61名の学年別内訳は、1年22(45)名、2年20(36)名、3年10(27)名、4年9(5)名であった(括弧内は2017年度人数)。

また自由科目であるが、国際コミュニケーション学科および心理学科は、科目の読み替えまた自由科目であるが、卒業単位に認定される。単位認定される2学科の履修者は32名で実履修者の52.5%(2017年度47.2%)、それ以外は29名であった。

(表1)履修者の詳細

学部学科	1年	2年	3年	4年	合計	4月末
物理						2
機械工学	2				2	4
生命科学	1	17			18	1
電子電気	8(1)	(1)	1		8(1)	14
建築	5	1			6	3
環境科学	1				1	1
国際コミュ		15	9(1)	8	32(1)	27
人		1	(1)	9	1(1)	33
文	(1)	(1)	16	8	(3)	(3)
人間社会						0
福祉実践						0
情報		3	(1)		3(1)	4
経済						4
教育						1
経営	1			1	2	19
デザイン	4		1		5	4
心理		(1)			(1)	2
合計	22(2)	20(1)	10	9	61(6)	86

※()内の数字は、15回全欠席者4名、休学者2名に当た人数。

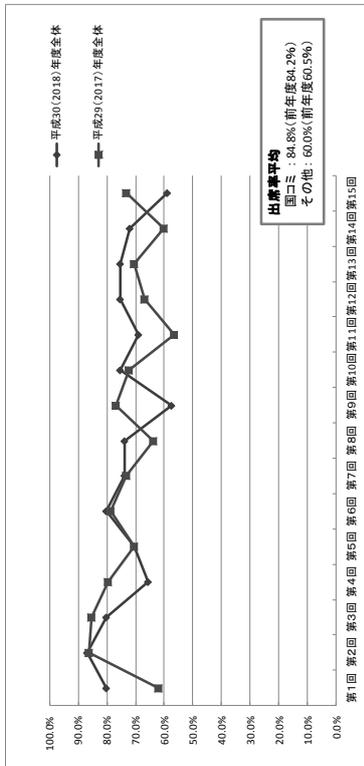
2.3 出席率

平均出席率は73.0%(2017年度71.7%、2016年度75.2%)であった。最高は86.9%(第2回)、最低は57.4%(第9回)であった。出席率の詳細は図1参照。第9回、第15回の出席率が特に低かった。例年、学園祭後と最終授業回の出席率が低下する傾向が見られる。今年度は、学園祭直後の第8回をレポート提出回としたため、出席率は高かったが、その翌週の第9回が極端に低いという状況が見られた。最終授業回では、昨年はレポート提出日のため高い出席率であったが、今年度は第14回をレポート提出回としたため、最終授業での出席率は低下した。

また、単位読み替えのある学科のみの平均出席率は、84.8%(2017年度84.2%)、それ以外の学科は60.0%(2017年度60.5%)であった。単位読み替えのある学科は、第9回と第

15回以外は全て80%以上の出席率を保っていた。これに対して、単位読み替えない学科は、後半の出席率が低下し、最終回は50%を切った。このことが全体の出席率を下げる原因になったと考えられる。

図1 出席率



2.4 単位修得率

単位修得者は46名で、全欠席者と中途休学者を除く単位修得率は75.4% (2017年度75.9%、2016年度77.6%)であった。

単位読み替えないある学科の単位修得率は91.0 (98.0) %、単位読み替えない学科は57.1 (56.1) %となり、単位読み替えない学科とそれ以外では34 (42) ポイントの差があった(括弧内は2017年度)。単位読み替えないかどうかによる差が非常に大きかった。出席率にも大きな差があった。全欠席者4名のうち3名は単位読み替えない学科であり、学生の授業への取り組み態度により、単位修得率にも差が出たものと考えられる。

3 授業評価

第15回授業内で、今後の授業改善のための終了時アンケート(記名式)を実施した。回答数は39名(2017年度77名、2016年度49名)であった。アンケートをもとに学生による授業評価を見ていく。

3.1 教育目標の達成

行動目標・到達目標に関し、達成度を4件法で尋ねた。

Q5「キャリアに関する知識や理論を知り、自分のキャリアを考える方法が身に付いた」に「4:十分に達成された」「3:割と達成された」と肯定的に答えた割合は97.4%(2017年度96%)であった。同様に肯定的な回答はQ6「社会に出て働くことの際々な側面について理解し、卒業後に社会人として活躍するために必要な意識を育成することができた」92.3%(2017年度91%)、Q7「授業で学んだ知識を他者に説明したり、日常生活で活用できるようになった」84.6%(2017年度81%)となった。

全体の傾向は昨年と特段大きな変化はないが、全ての項目で「とてもそう思う」の割合が増えている。一方「あまりそう思う」の割合も一定数あり、クラス内の学生の評価にばらつきがあったと考えられる。

Q8「学んだこと、身についたことの自由記述」には、「コミュニケーション能力、協調性、

自分の意見を言うこと」「将来について考えるようになった」「知らないワードを知ることができた」「自分のやりたいことが見つかった気がする」「他者の発表にアドバイスするため、客観的な視点が見えた」「ストレスの対処法」等の記述があった。

3.2 学生の満足感・反応

(1) 学生の受講満足感

Q1「この授業に出席して、どのように思いましたか」と、Q4「この授業を後輩にも推薦しますか」には92.3%(2017年度95%)が肯定的に回答し、授業に対する満足度は非常に高かった。「とても良かった」と回答した学生たちは自由記述欄に「今までの働くというイメージが、ほかの人の意見を聞いたことで変わった」「授業を通して自分や人生との向き合い方や考え方を見つけたことができた」「将来のことを考えることができた」「普段だった自分や考え方の機会のない人も話し合う事ができたので良かったし、勉強になった。」「たくさん議論を学ぶことができた」など満足感の感じられる記述をしている。

また、Q2「この授業を履修して良かった点はどのようなことですか」(複数回答)を見ると、「授業内容が将来の役に立つと思った」を46.2%の学生が選択している。「グループ活動」は33.3%、「色々なスキルが身についた」は38.5%、「学部学科混成」「授業内容が面白かった」は約35%が選択している。

後輩に推薦する理由の自由記述は、「働くことイメージが変わった」「将来へ必要になることが学べるから」「自分を改めて考えることができる」等の記述が多くみられた。また、「学校で何をやるのか決めていない人ほど、すすみたい」「自分の人生や今に不安なことがある人におすすめしたい」等の記述もあった。学習したことが自身のキャリアに活用できる、役立つ授業だと感じている様子が見える。

(2) 授業に対する取り組み

Q3「この授業にどのように取り組まれましたか」は「非常に積極的に取り組めた」「積極的に取り組めた」が82%(2017年度70%)、「まあまあ取り組めた」は17.9%(2017年度27%)であり、昨年と比べ、全体的に積極的に取り組んでいた様子が見られた。「非常に積極的に取り組めた」「積極的に取り組めた」と回答した者の自由記述には、授業内容に興味があったり、グループワークを楽しんだりしている様子が見られる。一方、「(出席したが)あまり積極的に取り組めなかった」と回答した者の自由記述には「自分から進んで会話できない等、グループワークに参加できていない部分がある」といった、自らのグループワークの質に満足できていない様子が見られた。

(3) 授業内容・進め方について

Q9「授業内容」(各回の授業テーマ・授業内で取り上げた理論の内容や量・教材)は無回答を除く有効回答者のほぼ全員が肯定的に回答した。「あまりよくなかった」と回答した1名の自由記述には、「就職活動の話があまりなかった」という指摘があった。

Q11「授業の進め方」(各回の授業構成・グループワークの内容・時間配分等)は、有効回答者全員が肯定的に回答した。

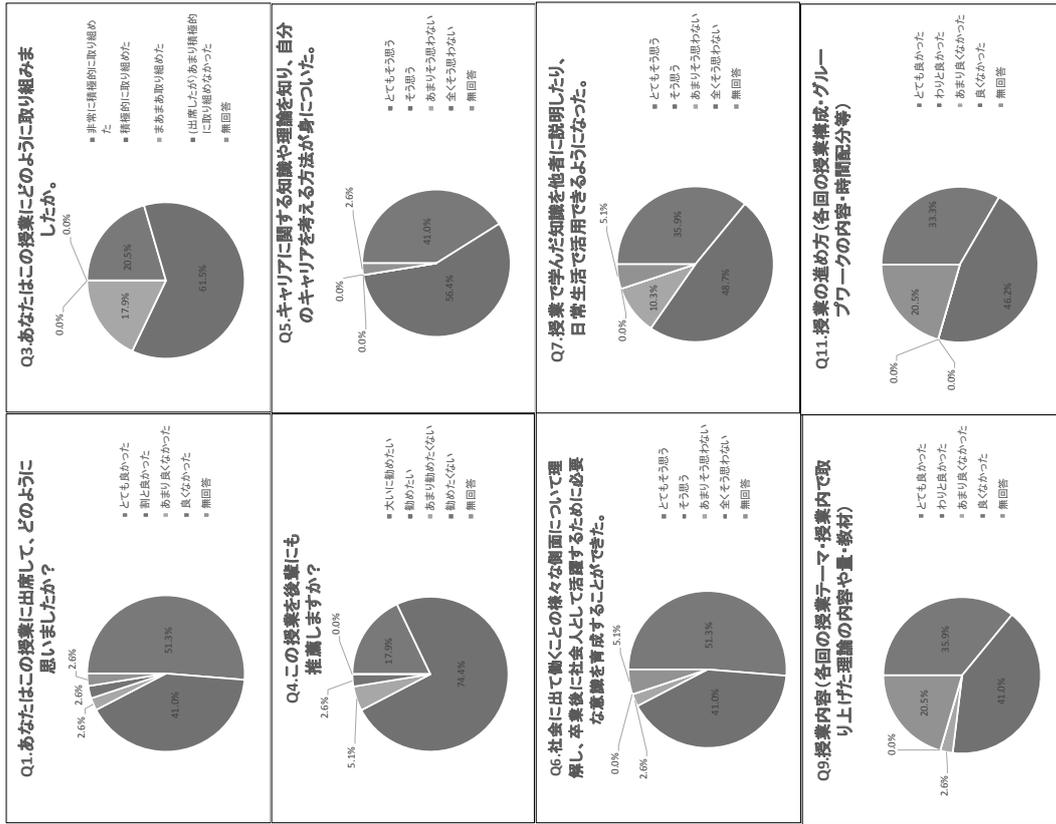
Q10「良かった授業回(複数回答)」では、「第8回モモチベーション」は48.7%、「第9回働く上でのストレス」は41.0%の学生が選択している。次いで「第13回自分の働き方を考える」「第2回さまざまな働き方」「第15回今後の計画を立てる」「第7回意思決定」と続き、これらはすべて80%以上の学生が選択している。

Q12「良かった授業の進め方」では、「アイスブレイク」は56.4%、「グループワーク」は53.8%の学生が選択しており、話し合いや発表の機会に高い評価が見られた。

Q13「1クラスの人数(クラスサイズ)」は「ちょうどよい」が60%(2016年度65%)、Q14「グループの人数」は「4人がよい」が61.5%だった。

以上、授業内容、進め方、クラスサイズとも、昨年に引き継ぎ学生の評価を得ることができたと言えことから、基本的な構造は、来年度も同様で良いと考えられる。

資料1 終了時アンケート結果詳細 (n=39)



6

3.3 教員から見た授業評価

(1) 学生の様子

全体として、学生たちは授業内容に興味を持ち、演習等にも積極的に取り組んでいた。単位履修が滞らない学生のうち単位修得できた半数の学生たちも熱心な取り組みであった。「将来のことや今後やるべきことを紙に書いてきたりまとめたことなどで今後に残るし、見返せるのでとても良いと思った。将来のことについてこんな目標や未来のビジョンというのには「キャリアデザイン」の授業を通して、自分のこれからの目標や未来のビジョンというのとはとても大切だし、その選択が沢山あればあるほど良いって事に気づきました。」等のアンケート記述からも学生の熱心な取り組み姿勢や学びの様子がわかる。

また、「今期で一番やりがいのある授業でした。毎週のローテーションで組むグループワークが楽しかったです」という記述のとおり、グループ内に意欲の差のあるメンバーがいることによる、学びの質や満足度の低下は見られなかった。また、どのグループも全く話せない学生は見られなかった。今年度から取り入れた「コミュニケーション課題」によって、どのような態度をとるべきかが明確に理解できた側面があると考えられる。

(2) 授業内容

各テーマについて、キャリアを考えることと紐付けた説明を行うことにより、授業全体につながりが出来、学生が学びやすくなった。特に「人の生涯にかかわる発達」「コンピテンシー」を学ぶことに対するモチベーションは、昨年よりは上がったと思われる。しかし、「よかった授業回」として選択される割合はまだ低いので、今後、さらなる工夫が必要だと考えられる。

(3) 授業の進め方

基本的な授業の進め方は、昨年同様で問題なかった。昨年度は、遅刻ぎりぎりに来る学生への対応が難しく、うまくグループが組めないことが課題であった。そのための準備をしていたが、今年度については、学生の集まりが非常に良く、グループ作りにも協力的であったため、スムーズに授業に導入することができた。

4 次年度に向けての課題

4.1 授業内容のブラッシュアップ

授業に対する学生の評価は高いものの、「良かった授業回」というアンケートであまり取り上げられない授業回もあるため、再度授業内容をブラッシュアップし、より学生にとって有益な授業としたい。具体的には、「なぜ学ぶのか」の意義をメッセージとして伝えることを継続していくこと、社会の変化に応じて、新しいトピックスの紹介や授業で扱う知識、理論との紐付けを取り入れていくこと等が考えられる。

4.2 グループワークの質を高める働きかけの継続

グループワークを取り入れられた授業であることから、「質の高いグループワーク」に対する学生のニーズは高い。この点は継続して改善が必要と考ええる。学生がモチベーションを高める機会を提供することで、グループワークの質を高める働きかけができればと考える。

4.3 SAの活用

SAが担当する業務については、これまでその特性(学年、SA経験や授業の履修経験)によって個別に対応していたため、仕事の内容にはばらつきがあり、十分に活用できない場面もあった。そこで、次年度は、SAに期待する行動を事前に話し合っておく等、授業時間より活躍できるような体制を整えておく必要があると考える。

以上

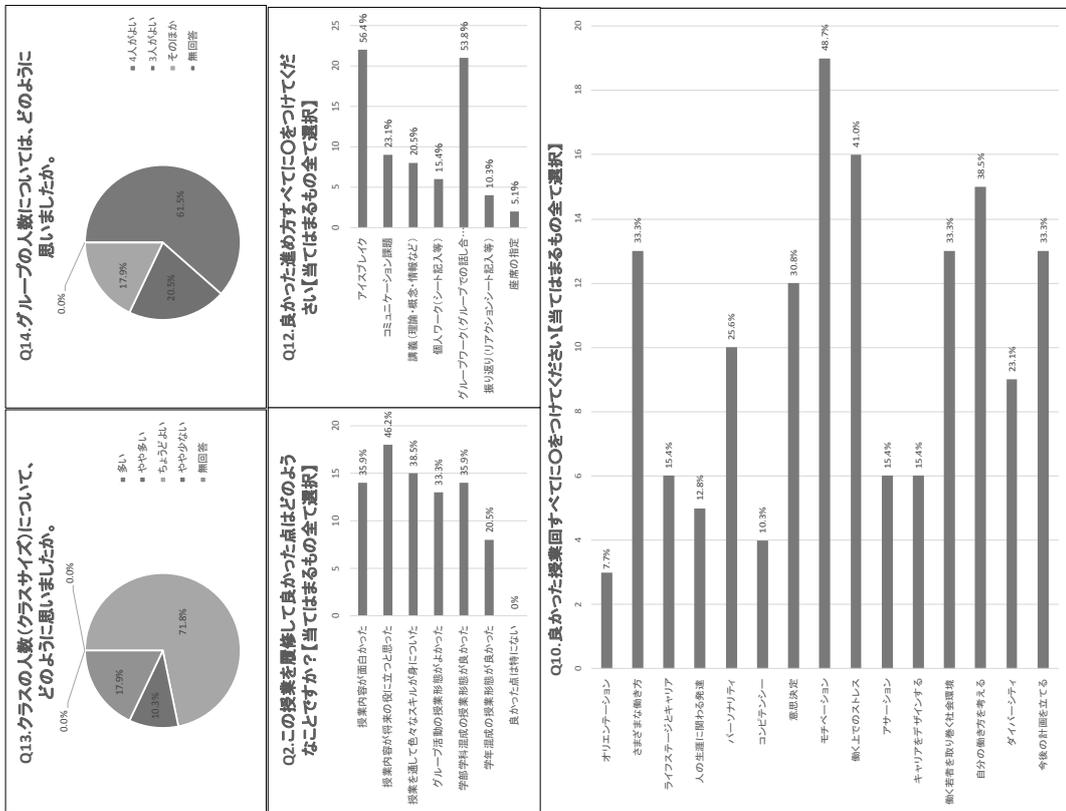
添付資料：1. 終了時アンケート結果詳細

2. 授業実施内容一覧

5

資料2 2018年度「キャリアデザイン1」授業内容

担当	回	授業名	主な内容(ワーク)	レポート
鈴木	1 9/14	オリエンテーション	・頭の中をアクティブにして学ぶ ・「キャリア」が何ぞい言葉かを考える ・「キャリアデザイン」を定義する	
鈴木	2 9/21	さまざまな働き方	・「仕事」「働くこと」からイメージすること ・目的から見る仕事の3つの側面 ・労働(職業)価値観尺度	
高橋	3 9/28	ライフステージとキャリア	・身近な大人の人生の役割を考える(「ワキヤリアレイブ」) ・あなたの人生の役割を考える(現在から将来へ)	
高橋	4 10/5	人の生涯に関わる発達	・人の一生における発達を考える ・大学入学後の私の変化	
鈴木	5 10/12	パーソナリティ	・エゴグラムによる自分理解 ・パーソナリティの特徴をつかむ(長所と短所・短所のリアレンジ)	中間レポート 出題
鈴木	6 10/19	コンピテンシー	・自分のなりたいたい職種に特微的な「できる人」の条件 ・汎用能力をセルフチェックする(社会人基礎力「明星大学Ver.」)	
高橋	7 10/26	意思決定	・私の意思決定プロセスの分析 ・「ケーススタディ」進路選択に悩む友人へのアドバイス	
高橋	8 11/9	モチベーション	・モチベーションの高い人の行動や考え方を「モチベーション」の観点から分析する(モチベーションをあげるためにできること)	中間レポート 提出
高橋	9 11/16	働く上でのストレス	・あなたのストレス対処方略(コピング)を知ろう ・あなたのサポーターを知ろう ・私のストレス分析シート	
鈴木	10 11/23	アサーション	・アサーティブな表現とは ・アサーションに影響する考え方のクセ ・アサーティブな伝え方(私メッセージ)	
高橋	11 11/30	キャリアをデザインする	・過去の経験を振り返る ・今の自分を見つめなおす ・大きな夢(キャリアの方向性)を描く	
高橋	12 12/7	働く苦楽を取り巻く社会環境	・データの見方(練習) ・データから考える	
鈴木	13 12/14	自分の働き方を考える	・働き方に関する考えやその変化を踏る ・社会の現実を知る ・自分の考えを表現する	最終レポート 出題
鈴木	14 1/11	ダイバーシティ	・ダイバーシティの考え方を知る ・考え方の多様性を体験する(「はたかちカード」演習)	最終レポート 提出
鈴木	15 1/25	今後の計画を立てる	・「私のキャリアデザイン」を表現する⇒ベア共有 ・これからの計画を立てる	



2019年3月13日・学部長会資料
 学長 大橋 有弘 殿
 担当副学長・明星教育センター長 菊地 滋夫
 (明星大学明星教育センター運営委員会 協議済み)

授業実施報告書「キャリアデザイン2」(2018年度後期)

Summary (概要)
 ・今年度の「キャリアデザイン2」は、1クラス開講し履修者は14名であった(全欠席者除く)。
 平均出席率は79.0%であり2017年度(77.3%)と比べ上昇したが、単位修得率は64.3%と2017年度(74.9%)と比べ下がった。
 ・終了時のアンケートによると、授業の到達目標達成について、「社会で働くために必要な職業や労働に関する基礎知識の習得」、「卒業後に社会人として活躍するために必要な意欲を育成すること」について全ての学生が肯定的に回答した。また、受講満足度も高かった。
 ・専門家から学ぶ3つのテーマに対する学生の評価はいずれも高かったが、中でも「人生に関わるお金」については全員が「とてもよかった」を選択しており、関心の高さがうかがえた。
 ・学生は、働くことに関する法律や労働問題、お金という切り口から、自分の将来の働き方や大学の学び、そして自分のキャリアデザインについて考えを深めていた。
 ・今年度は2年間お願ひしていた、専門家講師を見直すことにした。その結果、こちら側の意図を明確に伝えただけで講師を選定することができ、また学生にわかりやすい講義をしていただくことができた。
 ・次年度の取組として、①ブレゼンテーションの準備時間の拡大とブレゼンテーションの質の深化、②受講者数を増やす取り組みが挙げられる。

1 授業概要

- 1.1 教育目標
 社会で直面する問題についてのケースワークを行うつつ、チーム活動で多様な考えにふれ、勤労観、職業観を育成するとともに、社会で働く上で必要な基礎的知識を学ぶ。
- 1.2 行動目標・到達目標
 (1) 生きていく上で必要な、働くに関する法律、労働問題、お金についての基本的な考え方、姿勢を身につけること
 (2) 各課題について、チームで自立的に学習することにより、主体性、当事者意識、現実的対応力を身につけること
- 1.3 授業内容(前年度からの変更点)
 過去2年間同じ外部講師による授業を進めたが、今年度は、授業趣旨を踏まえ日本労働組合総連合会や日本証券業協会など各専門団体の協力を仰ぎ、新規3名の講師によって授業を行った。

2 実施結果

- 2.1 開講曜日・時限・設置クラス等
 2018年度は1クラス開講(後期金曜3限)、1名の教員で実施した。
- 2.2 履修者数
 後期の履修訂正期間を経て、履修者数は14名(全欠席者除く)となった。その他、履修登録はしていないが聴講していた者(4年生)も1名いた。詳細は以下表1の通りである。

本授業は、「1年次、2年次の履修を推奨する」(「社会的・職業的自立促進科目群」)についての第2次答申(平成27年2月12日)科目であるが、今年度の学年別履修者は、2年7名、3年7名であった。
 また自由科目であるが、デザイン学科は科目の読み替えを行っているため、卒業単位に認定される。

(表1 履修者の詳細)

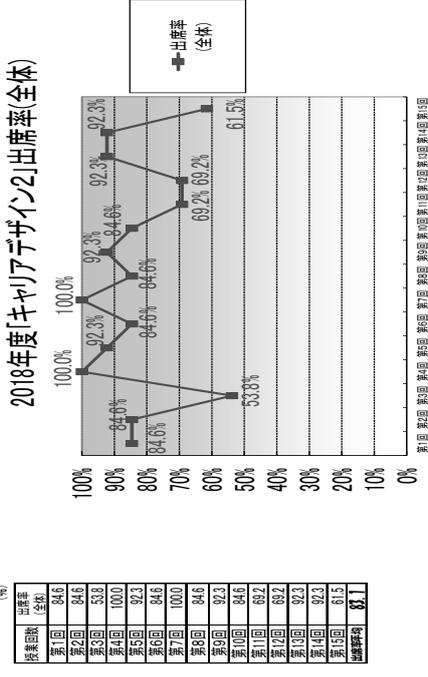
学部学科	2年	3年	合計
理工学部	0	1	1
電気電子工学系	1	0	1
環境科学系	1	0	1
人文学部	1	0	1
人間社会学科	1	0	1
国際コミュニケーション学科	1	0	1
経済学部	1	4	5
経営学部	1	0	1
デザイン学部	2	2	4
合計	7	7	14

※上記以外に、履修登録はしていないが聴講していた者(4年生)が1名いた。

2.3 出席率

平均出席率は79.0%であり、2017年度(77.3%)と比べ上昇した。最高は100.0%(第4回)および第7回、最低は50.0%(第3回)であった。出席率の詳細は図1を参照。

(図1 出席率)



2.4 単位修得率

履修登録者14名中、単位修得者は9名、単位未修得者は5名だった。単位修得率は64.3%であり、2017年度(73.9%)と比べ下がった。

Q8b「人生に関わるお金の自由記述では、「出生後～20歳までに必要な費用など、考えた事もなかったので、これから自分がお金を稼ぎ、どう使っていくかを考えるきっかけとなった」「人生にどれだけのお金が必要なのか、考える機会があった」「無償労働という新しい概念が学べた」など、ただ単に人生においてお金が大事というだけでなく、お金を通して自分の人生を考えたり、お金だけでなく人脈や人との関わりが人生において大事であることなど、新しい視点で人生を考えていることがわかる。

Q8c 多様な働き方の自由記述では、「地域限定型など、様々な働き方が世の中に存在することを知らず」「結婚したり出産したりする上で、会社の制度を知っていれば、自分の働きやすさの變動につながると思う」と制度とともに社会的な視点に気づき、自らの問題として捉えた学生がいた。

3.3 教員から見た授業評価

(1) テーマに対しての学生の関心

自分の将来について、「法律」「お金」「多様な働き方」という明確な視点で考えるきっかけとなった。単に「将来何になりたいのか」という問いで将来を考えるのとは違った視点で自身自身を見つめ将来を考えることができたと考えられる。講師の講義時やその後のプレゼンテーションのための調査、まとめの時点でも、リアリティを持って積極的に関わることが多かった。

(2) 学生の主体的・積極的な学びの姿勢

アンケートの結果の通り、多くの学生がこの授業の内容について関心を持っていたが、実際の授業内での学生の言動を見ると、授業への主体的・積極的な学びの姿勢にはばらつきもあった。少数ながら自由記述に「しっかり発表をしようとする人が増えるグループワークだった」という学生の意見にその事が現れている。

プレゼンテーションの場面などでは、他グループの発表に対しての質問が出ることも多く、質問内容が課題の本質に迫るものも散見され、学生の積極性が見られた。

3.4 その他

(1) 専門家講師について

今年度は2年間お預かりしていた、専門家講師を見直すことにした。その結果、こちら側が意図を明確に伝えられなかった点や講師を選定することができ、また学生にわかりやすい講義をしていただくことができた。

(2) プレゼンテーション準備について

今年度も昨年同様、プレゼンテーション準備の時間が2コマあり、その2コマについては学生にゴールを示し、基本的にはそれぞれのグループが進んでいくため、学生同士の討議時間が多くなくなっていった。多くの学生が各テーマに関心を示し、討議を行い、図書館やインターネットを使うなどしてプレゼンテーションの準備に熱心に取り組んでいた。しかし、テーマについて深く掘り下げて調べ発表するという点においては、課題が残った。その理由として、学生間の分業が上手に進まず、調査後に個人で調べた内容のグループ間の共有や全体構成について話し合う時間が十分に取れなかったのではないかと考える。

(3) 学生の単位修得について
学生の単位修得については、上記2.4 単位修得率で触れているが、昨年度と比べ単位修得率が下がった理由について述べたい。2.4では受講学生中5名が単位未修得となっていたが、この5名のうち4名は出席日数的には単位修得の範囲であった。しかし、授業最終日に実施した最終レポートを提出しなかったことで単位未修得となったものである。その理由については、「最終日の課題提出は理解していたが、他の授業の試験勉強を優先した。この授業は卒業単位にならないので、そのような選択をした」と述べていた。

4 次年度に向けての課題

4.1 プレゼンテーション準備時間の拡大およびプレゼンテーションの質の深化

学生の理解の深まりや調査内容、プレゼンテーションの質を高めるため、3回あった専門家

3 授業評価

第15回授業内で、今後の授業改善のための終了アンケート（記名式）を実施した。回答数は9名であった。アンケートをもとに学生による授業評価を見ていく。

3.1 教育目標の達成

行動目標・到達目標に関し、達成度を4件法で尋ねた。

Q5「職業に就いて働いていくために必要な職業や労働に関する様々な基礎的知識を習得することができた」に「4ととても思う」、「3-そう思う」、「3-そう思う」として回答であった。Q6「社会に出て働くことなどの様々な側面について理解し、卒業後に社会人として活躍するために必要な意識を育成することができた」に「4ととても思う」、「3-そう思う」と肯定的に答えた割合は88.9%であった。また、Q7「その他学んだこと、身につけたこと」としている自由記述には「グループワークの仕方、プレゼンテーション能力」「社会・人生に対する知識」「法律の知識」「資産を増やすための法」などの記載があった。以上のことから学生が行動目標・到達目標に関して達成したことがわかる。また、後述のアンケート結果や授業後の感想などから、働くに関する法律・制度、人生におけるお金の問題という切り口から、自分の将来や大学での学びに関わるキャリアデザインを考えたことがわかる。

その他、チームワークや自己表現・プレゼンテーション能力もこの授業を通して身につけたという意見がQ7以外のアンケート項目でも見られた。

3.2 学生の満足感・反応

(1) 学生の受講満足感

Q1「あなたはこの授業に出席して、どのように思いましたか」は100%、Q4「この授業を後輩にも推薦しますか」には88.9%が肯定的に回答し、授業に対する満足度は高いものとなった。また、Q2「この授業を履修して良かった点はどのようなことですか」（複数回答）では、「2: 授業内容が将来役に立つと思った」が88.9%、「3: 専門家の話を聞き知識が得られた」が66.7%、「1: 授業内容が面白かった」が44.4%であった。さらに、Q4「この授業を後輩にも推薦しますか」の推薦理由について「社会について知るよい機会」、「専門家の話が聞ける」、「自分はどのような仕事をしたのか考えるきっかけになる」と述べており、社会に出ることや将来のキャリアについての関心が高まったことがわかる。

また、Q1の自由記述でも、「いろいろな分野から話がきけて、自分に役立つ情報が手に入った」「グループワークの場数と、将来のための知識が同時に得られる授業」「普段聞けない話が聞けた」という意見があり、授業内容の評価や学生の肯定的な反応が見取れた。

(2) 授業に対する取り組み

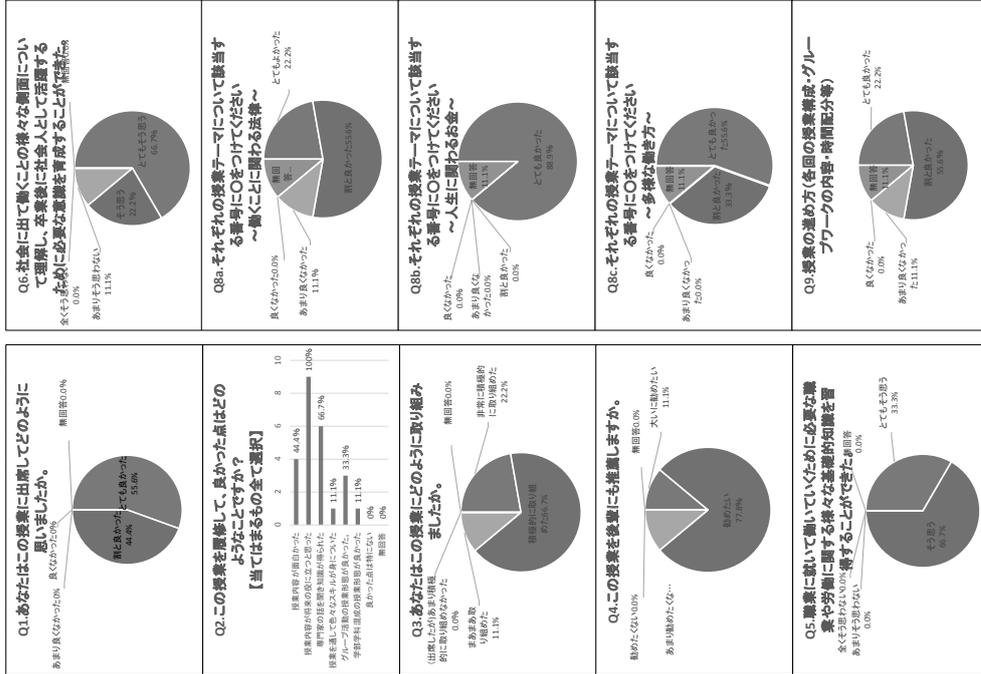
Q3「あなたはこの授業にどのように取り組みましたか」への回答は「4: 非常に積極的に取り組めた」、「3: 積極的に取り組めた」合わせて88.9%となっていた。その理由について、「就職する前に社会について知りたかった」と思い、調査にも積極的に答えた。「グループワークを進めていくときの情報共有やプレゼン能力がついた」「資料作りを率先して行うことで発表に協力できた」など積極的に授業に参加したことを自覚的に記述していた。

(3) 授業内容について

3つのテーマについての評価は、無回答の1名を除いて「4: とても良かった」、「3: わりと良かった」と肯定的に回答する学生が多かった。テーマ毎に見ると、「働くことに関わる法律」は88.9%、「人生に関わるお金」100%、「多様な働き方」は100%であった。なかでも、「人生に関わるお金」については全員が「とてもよかった」を選択していたことは、特筆に値する。

Q8a「働くことに関わる法律の自由記述では「法律なので少し難しい部分もありましたが、自分が働くときにとっても重要なのだと思います」「世間で問題視されているハラスメントについて改めて知ることができたから」と具体的な現実的な視点で働くことや働くことに関する法律を学べたようである。

資料1 終了時アンケート結果詳細 (n=9)



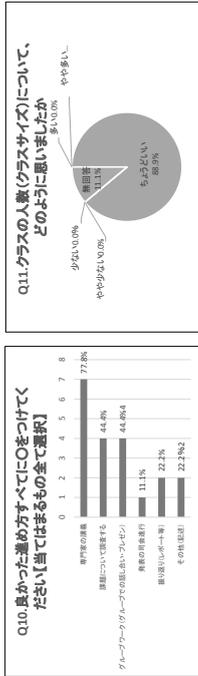
の授業を2回に減らし、その分事前の学習時間やプレゼンテーション準備の時間を増やし、学生間の討議を充実させるようにしたい。その際、今まで行ってきた「働くことに関わる法律」、「多様な働き方」、「人生に関わるお金」に関する3つのテーマを重複していた部分を見直し、2回の専門家での授業が設定できるよう工夫を図りたい。また、プレゼンテーションに盛り込む内容を調査する回で、今年度はノートパソコンを使用した回とiPadを使用した回があったため、iPadを使用したほうが作業時間を短縮でき、調査がスムーズだったように見受けられたため、今後はノートパソコンではなく、iPadを使用機材として貸与することも視野に入りたい。

4.2 受講者数を増やす取り組み
今年度の受講者数を増やす取り組みとして、①デザイン学部(卒業単位に認定される)に合わせた時間割の変更、②後期の履修訂正期間中のチラシの配布を行ったがいずれの取り組みも効果が現れなかった。そのため次年度に向けても引き続き同様の内容を課題として挙げ、以下具体的な取り組み内容を付与したい。
アンケート結果を見ると、学生は法律やお金、働き方についての知識が得られたことや専門的なテーマから自分の将来について考えられたことを評価していた。このことはまたまた授業を受けての結果であり、授業選択の時点ではそのような判断をしている学生はそれほど多くないようであった。実際にアンケートにもこの授業を履修しようと思った理由について、「学部の単位に入るから」「専門家の話が聞けるから」「アプレンティスを上げるため」「社会を知るため」と述べていた。しかし、実際の授業の中では、多くの学生が自分の生き方や働き方について関心をもち、キャリアデザインを考えるきっかけになっていた。

だとすれば、キャリアデザイン、働き方、お金という切り口で自分のキャリアを考えるというこの授業の趣旨をもっと明確に告知する必要がある。その部分が学生に伝わりきれていないという反省がある。今年度は、シラバスや授業パンフレットに授業内容を分かりやすく詳細に記し、様々な切り口から自分のキャリアを考える授業であることを明確に打ち出すようにしたい。

添付資料：1. 終了時アンケート結果詳細
2. 授業実施内容一覧

以上



資料2 授業実施内容一覧

回	日にち	授業内容
1	9月14日	オリエンテーション(チームビルディング)
2	9月21日	授業の事前準備(3つのテーマについて調べ、考える)
3	9月28日	専門家から学ぶ(テーマ: 自分を守る法律)
4	10月5日	プレゼンテーション準備1(まとめ、整理、調査)
5	10月12日	プレゼンテーション準備2(資料作成、共有、シナリオ等)
6	10月19日	プレゼンテーション・論評
7	10月26日	専門家から学ぶ(テーマ: 人生に関わるお金)
8	11月9日	プレゼンテーション準備1(まとめ、整理、調査)
9	11月16日	プレゼンテーション準備2(資料作成、共有、シナリオ等)
10	11月23日	プレゼンテーション・論評
11	11月30日	専門家から学ぶ(テーマ: 多様な働き方)
12	12月7日	プレゼンテーション準備1(まとめ、整理、調査)
13	12月14日	プレゼンテーション準備2(資料作成、共有、シナリオ等)
14	1月11日	プレゼンテーション・論評
15	1月25日	まとめ

2018年度 明星教育センター 自校教育事業報告

1. 明星大学資料図書館(15号館) 明星資料展示室展示

【明星資料展示室概要】

明星資料展示室は、明星大学創立50周年記念事業の一つである明星大学資料図書館(15号館)の耐震工事に伴い、2014(平成26)年に開設した明星大学の教育・歴史を紹介する展示室である。この展示室では、明星大学創立以来の歴史をテーマ別に紹介する常設展示、明星大学にゆかりのある人物・学生生活やキャンパスの移り変わりなどを紹介する企画展(年1回展示替え)、同フロア(資料図書館2階)にある明星貴重書室・明星ギャラリーとの共通テーマのもと、明星大学と明星大学図書館所蔵の貴重書との関係を紹介する企画展示(年数回展示替え)の3つ展示スペースからなる。

2018度は、企画展として「充実期の明星大学」展や同窓会創設50周年を記念して企画した「写真でつ・な・ぐ明星大学生の歴史」展、明星大学図書館企画「ウィリアム・モリス 一理想の書物を求めて」展の合同企画として「明星大学とイギリス—人文学部英語英文学科の教育—」展を開催した。以下、2018年度の資料図書館明星資料展示室の展示に関して、会期・展示内容(テーマ)を報告する。

【明星資料展示室展示記録】

会期	内容(テーマ)
2018年11月3日～ 2019年10月下旬	<p>【展示内容】</p> <p>企画展「充実期の明星大学」</p> <ul style="list-style-type: none"> ■キャンパスの再開発 2005(平成17)年～2015(平成27)年 ■大学院研究科・専攻の改組 2005(平成17)年～2018(平成30)年 ■学生支援の充実 2007(平成19)年～2010(平成22)年 ■教育研究活動の充実 2008(平成20)年～2018(平成30)年 ■明星大学 明星教育センターの開設 2010(平成22)年
2018年11月3日～ 2019年10月下旬 (予定)	<p>【展示内容】</p> <p>企画展「写真でつ・な・ぐ明星大学生の歴史」</p> <ul style="list-style-type: none"> ■写真でつ・な・ぐ明星大学生の歴史について ■明星大学の学び ■部活動・愛好会での活躍 ■大学祭(星友祭)

2019年3月下旬～ 2020年3月上旬(予定)	<p>企画展「明星大学とイギリス—人文学部英語英文学科の教育—」展</p> <ul style="list-style-type: none"> ■「明星大学とイギリス—人文学部英語英文学科の教育—」展について ■人文学部英語英文学科の誕生 ■第1回ヨーロッパ研修旅行 ■人文学部英語英文学科写真展ハネル
-----------------------------	--

【2018年度 展示の様子】

■準企画展準企画展「充実期の明星大学」



■準企画展「写真でつ・な・ぐ」



2. 明星教育センター自校教育講座

明星教育センターは、明星教育に関する研究・啓蒙・広報活動並びに明星教育の具現化及び学生の社会的・職業的・自立促進等に関する教育研究活動を実践するために、自校教育事業でも明星教育センター自校教育講座を開催している。

2018年度は、明星大学同窓会創立50周年記念であったことから、明星大学同窓会の協力のもと、同窓生3名をゲストスピーカーとして招聘した。同窓生3名は、社会人としての経験を持ち合わせながら、現在の明星大学にも携わっている人物を選定した。また、明星大学の今を語るということで、在学生2名もゲストスピーカーとして迎えた。以下、概要を報告する。

【講座内容】

開催日	概要
2019年2月23日 14:00～15:30	<p>■テーマ：明星教育を語る—明星大学の昔と今—</p> <p>■内容：明星大学同窓会50周年を記念し、歴代同窓会長を講師に迎え、明星教育(実践躬行に基づく体験教育)について、学生時代の体験とともに語っていただく。在校生を交えて、大学生活の中の明星教育で時代とともに変化しているものや変わらず受け継がれているものなどを語り合い、「明星教育とは何か?」を考えるきっかけを得る。</p> <p>■ゲストスピーカー： 菊田 秀次氏 (理工学部機械工学科2期生、前明星大学同窓会会長) 羽山 徹氏 (人文学部経済学科14期生、明星大学同窓会副会長) 澤 利夫氏 (人文学部社会学科5期生、明星大学教育学部非常勤講師) 木村 聡氏(教育学部教育学科3年生) 野口 明里氏(教育学部教育学科3年生) コーディネーター 原田 久志氏(理工学部化学科6期生、明星大学理工学部教授)</p> <p>■会場：明星大学資料図書館2階 明星資料展示室 準企画展示室</p>

【講座案内チラシ】

2018年度 明星教育センター自校教育講座

明星教育を語る—明星大学の昔と今—

明星教育(実践躬行に基づく体験教育)について、卒業生・在学生の体験談が語り、「明星教育とは何か?」を考えます。

【日 時】 2019年2月23日(土) 14:00～15:30
※ 開場時間 13:30

【ゲストスピーカー】
菊田 秀次氏 (理工学部機械工学科2期生、前明星大学同窓会会長)
羽山 徹氏 (人文学部経済学科14期生、明星大学同窓会副会長)
澤 利夫氏 (人文学部社会学科5期生、明星大学教育学部非常勤講師)
木村 聡氏 (教育学部教育学科3年生)
野口 明里氏 (教育学部教育学科3年生)
 コーディネーター
原田 久志氏 (理工学部化学科6期生、明星大学理工学部教授)

【会場】 明星大学資料図書館2階
明星資料展示室 準企画展示室

【問い合わせ先】
 明星大学明星教育センター
 〒191-8506
 東京都日野市星久保2-1-1
 TEL: 042-591-6534
 FAX: 042-591-6549
 E-mail: mec@mec.msbel-u.ac.jp

【講座の様子】

